

ジョン・ムーア・トレイルの16日

ヨセミテからホイットニーまで 350 kmの旅



バーナー・ピーク(3,943m)とサウザンアイランド・レイク(2,997m)

トレイル紀行

ジョン・ミューア・トレイルの16日

Day 1 サンライズ

2004年7月23日午前8時、ハッピー・アイルのトレイルヘッドを通過。私たちにとつて、2回目のジョン・ミューア・トレイルのスルーハイク（全行程踏破）が始まった。



	MI	KM
VERNAL FALLS BRIDGE	0.8	1.3
TOP OF VERNAL FALLS	1.5	2.4
EMERALD POOL	1.6	2.6
TOP OF NEVADA FALLS	3.4	5.5
LITTLE YOSEMITE CAMPGROUND	4.3	6.9
GLACIER POINT	8.2	11.3
HALF DOME	8.2	11.3
CLOUDS REST	10.5	17.0
MERCED LAKE	13.1	21.0
TENAYA LAKE	16.4	26.0
TUOLUMNE MEADOWS	27.3	44.0
MOUNT WHITNEY		
VIA JOHN MUIR TRAIL	211.0	340.0

NO PETS ON TRAILS

ハッピー・アイルの案内板

今回の計画は、2年前に17日間で歩いた時より1日短い。記録は意識していないが、私たちは、前回より少し難しいことにチャレンジすることに魅力を感じる。

最初のチャレンジは、初日にサンライズ・マウンテンを超えること。ハッピー・アイルの標高は、1219m。11マイル（1マイルは約1.6km）先のサンライズ・マウンテンの標高は2950m。一日で1700m以上登り、その先のサンライズでキャンプする。

ジョン・ミューア・トレイル最大の難所といわれる4023mのフォレスター峠でさえ、登り始めの2900mのローワービッド・メドウからの標高差は1100mだ。酸素の薄いフォレスター峠越えも大変だが、標高の低いヨセミテバレーは暑い。サンライズ・マウンテンを1日で超えるのは、簡単ではない。

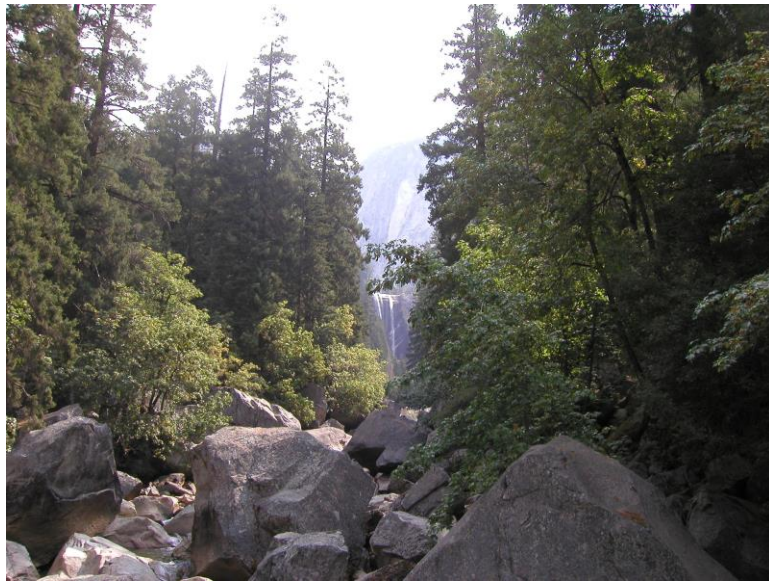
前回は、サンライズ・マウンテンの頂まで、あと少しというところで断念。頂への最後のクリーク（小川）でキャンプした。

今回はトレイルヘッドに近いカレー・ビレッジに宿泊して、出発を一時間以上を早めた。暑さと急傾斜のリトル・ヨセミテバレーまでの登

りを、太陽が高くなるまでに通過する計画だ。ハッピー・アイルの案内板を過ぎると、しばらくは森の中のコンクリートで舗装された道。左の山からは森の木々が覆いかぶさり、右下にはマーセド川を見下ろす谷がある。

夏時間を採用しているカリフォルニアの午前8時は、日本では午前6時半くらいである。真夏でも今の時間は肌寒いくらいだ。

1kmほど歩くと橋があり、その橋の左手奥に水煙にかすむバーナル・フォール（落差97m）が見える。



JMTから見たバーナル・フォールの遠景

残念ながらジョン・ミューア・トレイルは、バーナル滝の近くを通らない。

もし、バーナル滝に立ち寄りたければ、橋を渡って左に折れ、マーセド川に沿ったミスト・トレイルを行く。ミスト・トレイルは、水煙を浴びながら滝つぼの淵を歩く人気のトレイル。水量や風向きによってかなり濡れるため、レインコートを着る人もいる。

トレイルは、ここからパノラマ・クリフ（崖）の下、急峻な登りで、スイッチバック（九十九折れ）の繰り返しに息が切れ何度も立ち止まる。スイッチバックを登り切り、バーナル滝の上を過ぎると、ネバダ滝（落差181m）を見下ろすビューポイントに出る。白い帯のように滑り落

ちるネバダ滝もすごいが、その上の花崗岩の岩山、リバティ・キャップの雄姿もなかなかだ。



リバティ・キャップとネバダ・フォール

そのリバティ・キャップや背景の山が、かすんでいる。よく晴れているので、普段ならもつとはつきり見えるはずだが、おそらく、どこかで山火事があり、その煙の影響なのだろう。

アメリカ西部では、落雷などが原因で山火事が起きる。夏の間、雨がほとんど降らないため、一度起きるとなかなか消えない。国立公園の場合、道路や設備に被害が及ぶような場合を除き、自然に鎮火するのを待つ。時には、広大な森林が焼失する場合があるが、それも自然だとする考えなのだ。燃えた後には新しい芽吹きがあり、いつかまた同じような森に回復する。

2年前、ヨセミテを東西に横切る120号線を通った。そこから数100m先で炎が上がっていた。私は驚いたが、現地の人は冷静だった。規模の小さな山火事は、珍しくないのだ。

山火事がひどくなると、ビジターセンターやウィルダネスセンターの掲示板で知らせる。今回パーミット（許可証）をもらう時に、レンジャーは山火事について何も言っていなかった。今朝のかすみは、遠くで起こった山火事の煙が風で流されてきたのだろう。

ここで、トレイルはグレーシャー・ポイントから降りてきたパノラマ・トレイルとつながる。グレーシャー・ポイントからはハーフ・ドームが目の前で、ヨセミテバレーを見下す絶景の観光ポイントだ。

ジョン・ミューア・トレイルのパーミットを

申請しても、ハッピー・アイルからの入山枠を超えていれば許可証がもらえない。そんなとき、日程にゆとりのないハイカーは、グレーシャー・ポイントから出発する。

トレイルは、ここからネバダ滝の上にかかる橋まで下りになる。ネバダ滝は、ヨセミテ・フォールのトレイルと並んで人気のハイキングコース。お昼時は、たくさんハイカーが休んでいるが、まだ午前10時、ハイカーの姿はまばらであった。

滝の上で休み、水筒に水を入れる。これから更に暑くなるし、長い登りに備えてこまめに水分補給をしなくてはならない。

ネバダ滝から1kmほど登るとトレイルは狭い平坦な谷間に出る。ヨセミテ溪谷を小さくしたようなU字型の谷、リトル・ヨセミテバレーだ。そこには、ソーラー・コンポジットのトイレと各サイトにフードロッカーあるキャンプグラウンドがある。

時差ぼけで調子がよくない場合は、ここでキャンプした方がよい。

アメリカ西海岸との16時間（夏）の時差の影響は大きい。夜眠れず昼間眠い、食欲がなくて体がだるいなどの症状が数日続くこともある。

私たちも2日前にロサンゼルスについてばかりだ。よく時差ぼけに悩まされたが、最近になって少し慣れた。到着した日も、その翌日もスケジュールをぎつしり組んで動き回る。2日間びつしり動いたので、昨夜は疲れ果ててよく眠れた。そして、3日目の今日、出発した。忙しくした方が早く時差に慣れるようだ。

リトル・ヨセミテバレーを通過したのは正午頃、ここまで厳しい登りが続き、4マイルを進むのに4時間かかってしまった。これから少し傾斜が緩くなる。ペースは上がるはずだ。

リトル・ヨセミテバレーのわずかな平地を過ぎると、森の中をなだらかに登るトレイルが始まる。森を構成するのはパイン（松）やシダーと呼ばれる杉、ヒノキの仲間のレッド・ウッドである。夏の降水量が少ないため、森の中も乾燥し、下草もまばらだ。トレイルの土も乾き、

歩くと砂埃が上がる。

トレイルの脇の花崗岩の岩で休憩する。岩にリックをもたれかせ、座って水を飲み、カロリーメイトをほおぼる。昼食は、何度かに分けてビスケットやクラッカーですませる。

サンライズまでいくつかのトレイルの分岐点がある。テナヤ湖の近くにそびえるクラウズ・レストへのトレイル。リトル・ヨセミテバレーの奥のマーセド湖へのトレイル。そして、サンライズ・レイクスへ向かうトレイルなど。

ヨセミテでは、トレイルジャンクション（分岐点）に鉄板をくりぬいた標識があり、行先と距離を表示してある。ジャンクションでは、面倒でも地図を開き、現在地を確認することになっている。以前、間違えてとんでもない方向に進んでしまったことがあるからだ。

サンライズ・レイクスへのジャンクションから1マイル歩くと、サンライズ・クリークを横切る。今年は水が一滴も流れていない。二年前には水があり、5時を過ぎていたのでここで、キャンプした。キャンプファイヤーの石囲みや切り株の椅子があるが、水がないため、しばらく使われていないようだ。

時計を見ると3時、前より2時間以上早い。これならサンライズまで行けそうだ。

前回ここでキャンプ中、熊が現れた。笛を吹き、熊に向かつて石を投げる。一頭を谷に追い払うとまた次が現れた。親子連れだった。再び、石を投げ、笛を吹いて追い払う。

その後、熊は姿を見せなかったが、翌朝、フードキャニスターが10mほど下に転がっていた。熊は、夜になってまた現れ、キャニスターをいたずらしたのだ。

それ以来ヨセミテで熊に会っていない。フードキャニスターの携行が義務化され、熊もハイカーの食料を奪えないと知ったからだろう。

そのキャンプサイトを過ぎるとサンライズ・マウンテンへの最後の登りだ。急なスイッチバックの途中で、南東側が開けた斜面に出た。遠くで白い煙があがっている。「山火事だ」ここから数km先、エコー・バレーかマーセド・レ

イクの辺りだ。が、煙の様子から小さな火災で、大きな影響はなさそうだ。

ジョン・ミューア・トレイルはサンライズ・マウンテンの東側の肩を超える。その肩を超え、森を抜けると広い草原に出る。その向こうに、サンライズ・ハイシエラ・キャンプがある。

ハイ・シエラ・キャンプは、夏の間だけ営業する宿泊施設。宿舎はキャンパスの屋根に簡易ベッドがついたテントキャンビンで、食堂と売店、トイレやシャワーもある。日本の山小屋と違い、定員制で予約が必要。同じようなキャンプは、マーセド・レイク、ボゲルサング、グレン・オーリン、メイ・レイクにある。それらをつなぐコースは、ハイ・シエラ・ループと呼ばれ、キャンプ用具を持たなくてもヨセミテのハイカントリーを一周できる。

サンライズには、バックパッカー用の広々としたテントサイトがあり、ソーラー・コンポジットのトイレと簡易水道がある。広いキャンプグラウンドに人影はまばらで、サイトは自由に選べた。私たちは草原を見下ろせる絶景の位置にテントを張った。到着時刻は、午後5時半。初日にサンライズを越えることができたが、さすがに疲れ果ててしまった。



サンライズ・キャンプから草原を見下ろす

Day 1, Sunrise High Sierra Camp, Elevation 2,844m
12.5 miles (20 km) from Happy Isles, Yosemite Valley

Day 2 ツオルムン・メドウス

空が明るくなり始めたころ起床。寒さにこごえながら、バーナーを組み立て、お湯を沸かす。コーヒーを片手に、草原に目をやると、夜露に濡れた草地がうっすらと浮かび上がる。その間を流れる細いクリークが、明るくなり始めた空を映して鏡のように輝いている。

私は、日の出前の光景を見ながら、コーヒーを飲むこの時間が大好きだ。ウィルダネストリップで最も贅沢な時間である。

出発して間もなく、正面に見えるのはカセドラル・ピーク（3325m）だ。尖ったピークを見ながら歩くトレイルはなだらかで、遠くには針葉樹の森があり、その周りは草原が広がる。そこに群生するルピナスが一斉に花を咲かせている。



カセドラル峠から望むカセドラル・ピーク

森の中に美しい湖が見えたら、その辺りがカセドラル・パス。この峠は、頂がはつきりしないため、いつの間にか通り過ぎていく。もちろん看板もない。ジョン・ミューア・トレイルの最初の峠であるが、峠らしくない峠だ。

森の中の湖は、アップパー・カセドラル・レイク。1マイル（1.6km）北には、ローワー・カセドラル・レイクがある。どちらもツオルムン・メドウスからの日帰りのハイカーに人気だ。

カセドラル・レイクから森の中の砂地のトレイルを下る。木々の間からツオルムン・メドウスの緑が見え、そのうち、タイオガ道路（120号

線）を走る車のエンジン音が聞こえてくる。遠くから響く車の音は、妙に懐かしく感じられる。

ツオルムン・メドウスは、東西およそ3km、南北1kmの広大な草原。タイオガ道路はその南端にあり、そこから見る草原は美しい。ドライブしていても車を止め、どこまでも歩きたくなる。

草原の小道を歩くとその広さを実感でき、中央から丸みをおびた三角形のレンバート・ドームやカセドラル・ピークがよく見え、蛇行するツオルムン川の清流が草原の風景を引き立てる。



ツオルムン・メドウス

かつて、ジョン・ミューアは、羊の群れと共にここを訪れた。彼は、羊飼いでなかったが、ベースキャンプで食料の運搬や連絡を担当した。暇を見つけて周辺の山に登って氷河の痕跡を発見し、ヨセミテの形成に氷河が深く関わったという学説を発表したのだ。この考えは、今でも一般的で、ヨセミテ・バレーのビジター・センターには、ヨセミテ渓谷が氷河で形成された展示とジョン・ミューアの像がある。

今年は、比較的春が早く、7月下旬の今、草原は、緑から茶色へ色が変わりつつあった。夏の降水量が極端に少ないヨセミテでは、雪解け

後、数週間で草は枯れ始める。

ツオルムン・メドウスには、西からビジター・センター、ガソリンスタンドとマウンテンショップ、仮設の商業施設（ファーストフードのグリル、郵便局、食料雑貨店）、キャンプグラウンド、バックパッキングの許可証を発行するウィルダネス・センター、ツオルムン・ロッジがある。施設が一番西の端から東の端まで3kmあり、シャトルバスが走っている。シャトルバスは、無料で、テナヤ湖からタイオガ峠までの間を往復している。

ヨセミテ・バレーからのバスもある。バスは午前8時過ぎバレーを出て、ハーフトームの裏が見えるオルムステッド・ポイントを通り、お昼にツオルムン・メドウスに着く。帰りのバスが出る午後2時まで、ツオルムン・メドウスを散策できる。

そのビジター・センターの裏を通り、キャンプグラウンドを抜けてタイオガ道路に出る。白いキャンバステントの仮設店舗のグリルで、ホットドックとコーラを買って昼食にした。

お昼時のグリルの前は混み合う。さほど、広くない駐車場に車が絶えず出入りする。私たちのようなバックパッカーも多い。

ツオルムン・メドウスは、ヨセミテの高山地帯の中心で、ジョン・ミューア・トレイルやパシフィック・クレスター・トレイル（メキシコ国境からカナダ国境まで続く）の中継点でもある。ハッピー・アイルからのパーミットが取りにくいことや休暇の長さの関係で、ここをジョン・ミューア・トレイルの出発点にする人もいる。

隣のガソリンスタンドには、山用品の店があり、そこで、1.5リットルのリザーバーを買う。妻が、歩きながら水を飲むのにと、チューブで飲む水筒が気に入ったからだ。

前回のスルーハイクでは、この郵便局に局留めで日本から食料を送った。今回は、パーミットをもらいにウィルダネス・センターに立ち寄った時、そのフード・ロッカーに入れておいた。郵送では、4千円もしたが、フード・ロッカーは無料だ。

フード・ロッカーは、もともと駐車場の車に

食料などを置かないために設置されている。車内に食料やごみを置いて車を離れると（特に夜間）熊に狙われるからだ。熊は食料の匂いを嗅ぎつけ窓ガラスを壊す。トランクに入れてあつても、後ろのシートをはがしてしまう。すごい力だ。ヨセミテでは多い年で年間1300台もの車が食料を狙う熊によって壊された。公園局では、ビジターに適切な食料保管を呼びかけたり、主な場所にフード・ロッカーを設置したりした。その結果、数年後には熊に壊される車の数は激減した。



ウィルダネス・センターの駐車場にあるフード・ロッカー

ツオルムン・メドウスのキャンプグラウンドは300サイトある。そのうちの6割は予約で、残りの120サイトは当日の先着順。しかし、実際には連泊が多く、当日の空はわずかだ。8時の受け付け開始時に来ないと泊まれないことがある。そんな時は、キャンプグラウンドの東のはずれにあるバックパッカー専用サイト（先着順だが制限がない）に行く。車では入れないため、レンバート・ドームからパックステーションに向かう未舗装の道路に駐車して荷物を運ぶ。料金は一人5ドルで、サイトの前にあるポストに入れる。私たちも前回のスルーハイクでここに泊まった。今回は少し足を伸ばし、ライエル溪谷の奥でキャンプする予定だ。

レンバート・ドームの手前でツオルムン川に架かる橋を渡る。このツオルムン川は、10キロほど下流のいくつもの滝を経て、「ツオルムン川のグランドキャニオン」を通り、ヘッチ・ヘッチイ貯水湖に流れ込む。そして、ベイエリア（サンフランシスコ周辺）の人々の飲料水となる。

ダムができたのは、国立公園になってからのこと、急増するベイエリアの人口に合わせて大規模な貯水湖が必要となった。ジョン・ミューアも反対運動に加わったが、1913年、ダム建設が認可された。

私たちは、ウィルダネス・センターの駐車場を囲むように設置されているフード・ロッカーから自分の段ボール箱を取り出した。このフード・ロッカーは、幅も奥行きも広い。たくさんの人が出し入れするので、手前に置いても奥に隠れてしまう。大きめで目立つ入れ物を使うと探しやすい。

箱を近くのピクニックテーブルまで運び、パッキングをする。ごみは、大きなごみ箱に捨てる。ごみ箱というより鉄の小屋のようなもので、ステップに登り、上部の投入口にあるカラビナでロックされた扉を開けてごみを入れる。

ゴミ箱は、熊に壊されない強度があり、人間以外には開けられないように工夫されている。



ごみ箱

重くなったフードキャニスターをリックに

入れて歩き出す。ツオルムン・メドウスの施設の一番東のロッジの手前からツオルムン川の支流のダナ・フォークとライエル・フォークを渡って、JMT（ジョン・ミューア・トレイル）に戻る。トレイルは、東にクナ・クレスト（峰）、西にカセドラル山脈に挟まれたライエル川の流れに沿ってさかのぼる。川の流れはゆるやかで、底を覗くと、大きなマスが泳いでいた。

ドノヒュー・パスへの登りが始まるまでの10kmは、ほとんど勾配のない平地が続く。長いJMTの中で、ここにしかない平らな区間だ。

トレイルは、川に沿った草地や針葉樹の木立の中を通る。草地を踏みしめてできた一本の溝のような道なので、周りの草地よりも低い。それで、所々に水たまりがある。

バックパッキングの規範の中に、「水たまりはさけるな」と書かれてあった。「ブーツはすぐに乾くが、回り道をして踏まれた草はもとにはもどらない。」からだ。

溪谷の奥が迫ってきた頃、トレイル西側の木立を覗き込みキャンプ地を探す。東側は、ルールで禁止されているフラジェル（こわれやすい）地域に当たる草に覆われているからだ。

陽が傾きはじめた頃、木立の奥に平らな場所を見つけ、そこにテントを張った。



ライエル・フォークの流れ

Day 2, Lyell Canyon, Elevation 2,743m
16 miles (25.6 km) from Sunrise High Sierra Camp

Day 3 ドノヒュー・パス

空が明るくなり始めたころに起床。谷間の朝は寒い。ライエル川の川面から靄（もや）が立つ。冷え込んだ朝に見られる現象だ。夜の間に両側の3600m級の山から冷たい空気が降り、谷底にたまったのだ。

数年前、ここより少し奥でキャンプした時はもつと冷え込んだ。

テントのフライシートの結露を乾かそうと、倒れた木の上に広げた。しばらくしてシートをたたもうとすると、水滴が凍ってシャーベットになっていた。



早朝のライエル溪谷のトレイル

その時のキャンプサイトは、大きなファイヤー・サークルがあり、たき火をして体を温めた。溪谷を見渡せるよい場所だったが、今では「閉鎖区域」の標識が立つ。川の周りの草むらが踏み荒らされたからだろう。私は、川岸で水を汲むときは、草花を傷つけないように気を付けるが、多くの人が訪れるようになれば植生に影響が出るのは当然だ。

ライエル溪谷を突き当たると、ドノヒュー・パスへの峠道が始まる。はじめは、森の中のスイッチバック（九十九折れ）。次に、ライエル川の急流に沿った登り。そして、橋があり、渡

ったところにキャンプサイトがある。

この辺りは、「熊の出没が多い所」と加藤則芳氏の著書「ジョン・ミューア・トレイルを行く」に記してあった。NHKの番組でも夜の間に熊にかじられたリックを映していた。

以前、バックパッカーは、食料を木の枝に吊り下げていた。ここより先は木が少なく、森を抜ける前、この辺りでキャンプするバックパッカーが多かった。そのため、吊り下がった食料を狙う熊の出没も多かったのだ。

現在、ヨセミテでは、フードキャニスターの携行が義務になり、木に食料を吊り下げる方法は違法となった。フォードキャニスターは、熊が開けたり持ち運んだりすることができず、バックパッカーの食料を奪おうとする熊の出没は少なくなった。（本HPトレイルガイド編 (3) 山の食料保管 参照）

ライエル溪谷の森を抜けると小さな湖がある。そこから上に目をやるとライエル山の雄姿とその山腹に白く輝くライエル氷河が見える。ライエル氷河はヨセミテで現存する唯一の氷河だ。



ライエル氷河の遠望

ドノヒュー・パスへは、そこから1.5マイル。ライエル氷河が遠望できる小さな湖を渡り、山の斜面に刻まれたトレイルを歩く。再び小さな湖。その湖に置かれた飛び石を滑らないように

慎重に渡る。

その後、峠まではごろごろした石の原っぱで石の間の土の道や階段状のトレイルが続く。峠付近は比較的なだらかで、登ってきた道を見下ろすほどの勾配はない。



ドノヒュー・パスへのトレイル

午前11時過ぎ、ドノヒュー・パスに到着。ドノヒュー・ピークとライエル山の鋭い山並みがカリフォルニアの真つ青な空に突き刺さっている。その下の小さな池の水面は、峠を吹き抜ける風で波立つ。

飛ばされそうな帽子を押さえて、「アンセル・アダムス・ウィルダネス／インヨー・ナショナルフォレスト」と、書かれた木の標識の前で写真を撮る。振り返ると「ヨセミテ・ナショナルパーク」の標示板。ドノヒュー・パスという標識はない。

ここには普通、〇〇湖とか〇〇峠という標識はない。地図で確認するしかないのだ。その代わり、ヨセミテとインヨーのように管轄の境目には必ず標識がある。

管轄が違ふとルールが違ふ。例えば、ヨセミテでは、トレイルに犬などペットを連れて歩けないが、インヨーではOKだ。一般に国立公園のトレイルではペット連れ禁止で、国立森林ではそれが可能だ。



ドノヒュー・パス 3,368m

しかし、国立公園でも馬はOKである。それは、人間が飼う動物をストック（家畜）とペットに区別しているからだ。馬やミュール（馬とロバの合いの子）、それにラマなどは、家畜として連れて歩ける。パーミットを申請する時にも、連れて行く家畜の数を書く欄がある。

以前、反対方向からヨセミテを目指した時、峠を下るラマの一行とすれ違った。ホイットニーを目指す夫婦は、3頭のラマの背に荷物を載せ、自分たちはウエストポーチだけという身軽さであった。羨ましく思えたが、ラマの面倒をみるのは大変そうだ。

正午近くにドノヒュー・パスを降り始める。下りも花崗岩の石積みみのトレイル。1マイルほど下るとラッシュ・クリーク（小川）と湿地帯に出る。そのクリークに沿って下る。

最初のスルーハイクでは、この辺りの岩影でキャンプした。その時、クリークを挟んだ反対側の森の中で、馬を連れた一行がキャンプしていた。彼らのうちの一人が近づいてきて、「私たちは、たくさんのお食料を持っている。いっしょに食べないか。」

と、誘ってくれたが、すでに夕食を済ませた後だったので、丁寧に断った。

湿地帯は蚊が多い。蚊は雪解けの7月に多く、8月には少なくなる。前回は8月の下旬であったため、蚊はほとんどいなかった。それより以前であれば、草原や湿地帯でのキャンプは避けた方がよい。

その年、このラッシュクリークの近くで日本の学生にも会った。森の中でテントをたたんでいた彼は、加藤則芳氏の「ジョン・ミューア・トレイルに行く」を読み。加藤氏と同じような日程で30日かけて歩くと言っていた。

トレイルの東へと流れ込むラッシュ・クリークを離れ、再び登り坂になる。この先のアイランド・パスへは、森の中のあまり長くない登りであるが、下りに慣れた脚にはきつい。ここで、ベテランの夫婦のハイカーとすれ違う。彼らは、ホイットニーからヨセミテを目指すという。休暇の関係で、全行程を15日間にしたという。

「忙しい旅だ」

と、嘆いていたが、私たちより年配の二人の速さに感心した。

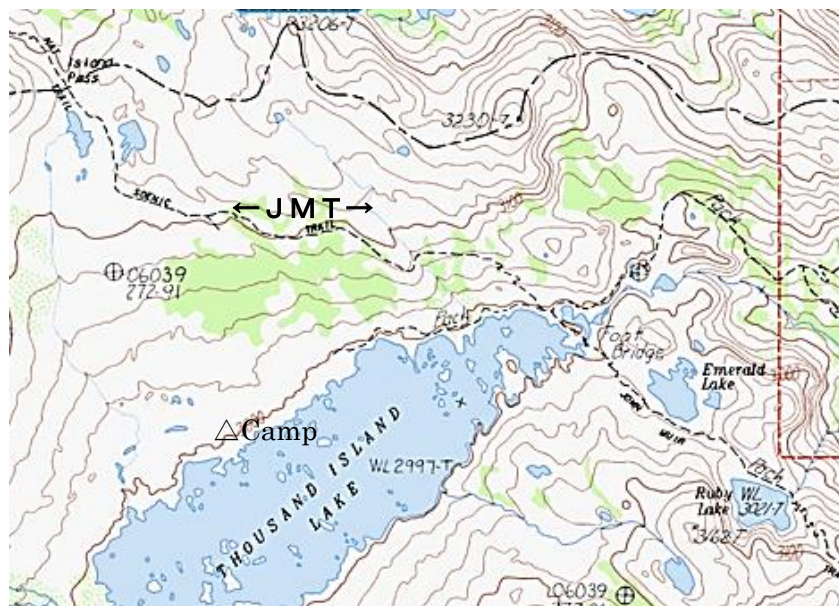
彼らは、フレーム・ザックの底に、アルミ製のフードキャニスターを付けていた。私たちのプラスチック製より一回り大きい。興味を持って聞くと、ネット販売で買ったという。値段は高いが使いやすいというので、帰宅後、ネットで探してみたが、見つからなかった。その後も、そのキャニスターを使っているバックパッカーに会わなかった。

アイランド・パスは、初日に超えたカセドラル・パス同様に、どこが峠の頂か、はつきりしない。ただ、左右に小さな湖がある平らな場所を過ぎるとゆるやかな下りになるので、あとから峠だったと気づく。

峠を下り始めると、するどい岩山のバーナード・ピークと数10もの小島や岩を浮かべたサウザンアイランド・レイクの雄姿が現れる。サウザンアイランド・レイクは、東西約2.5km、南北約1kmの細長い湖で、湖の多いこの辺りでも比較的大きい方だ。

私たちは、この美しい湖に何度も来ていて、「お気に入り」のキャンプサイトを決めている。そこは、東端の湖のアウトレット（水の流出口）

から1マイル（1.6km）奥。北岸の岩場の上だ。湖岸から100mほど離れているが、周囲の景色がよく見える高台にある。



アイランド・パス（左上）とサウザンアイランド・レイク

アイランド・パスから降りて来ると、真下に湖の中央部がある。このままオフトレイルハイクで下れば、1マイルもないが、ここからトレイルに沿って歩き、アウトレット経由でキャンプ地まで行くと2マイルはある。

私たちは、コンパスで方角を確かめながら「お気に入り」のキャンプサイトを目指して岩と疎林の斜面を下った。が、湖の北側には、広大な岩場が広がる。どこも同じような所なので、目指す私たちのキャンプ地がどれかわからなかった。湖岸に着いた時は、アウトレットに近づきすぎていて、もどる。午後3時半、ようやく「お気に入り」のキャンプサイトにたどりついた。

テントを張った後、森の中からたくさんの枯れ木を集めてキャンプに運んだ。そして、その夜は、夜更けまでキャンプファイヤーを楽しみ、星を見て過ごした。

Day 3, Thousand Island Lake
Elevation 2,997m
12 miles (19.2 km) from Lyell Canyon

Day 4 ジュエリー・レイクス

今朝は、朝日がテントに差し込むまで、寝袋の中にいた。

朝日に輝くバーナー・ピークを見ながらゆつくり朝食の支度をする。朝食は、アルファ米と味噌汁。ごはんにはふりかけを、味噌汁には乾燥野菜を少し入れる。

今日の目的地は7マイル先のロザリエ・レイク。急ぐ必要はない。10時頃、キャンプ地を後にする。トレイルに戻るまでの1マイル、何度もバーナー・ピークと湖を振り返り、写真に収めながら歩く。今朝も快晴、青空の下バーナー・ピークが美しい。

アウトレット（湖水の流出口）で、岩の上にいたマーモットにカメラを向ける。マーモットは、おとなしいが、食事時にチップモンクと呼ばれるリスはいたずら好きだ。ちよつと目を離すとジップロックの袋をひっかき、中の食料を奪おうとする。チップモンクは、ヨセミテ・バレーやエミグラント・ウィルダネスでよく見られるクッキーを狙って、テントを破られたという話も聞いたので要注意。

ここから、数マイルの間に、ため息が出るような美しい湖が点在する。今日の行程を短くしたのは、ひとつひとつの湖を十分楽しむためだ。



エメラルド・レイク

サウザンアイランド・レイクの少し先にあるのが、エメラルド・レイク。なだらかな花崗岩の岩山と湖畔に点在する針葉樹の木立に囲まれた静かな湖で、サウザンアイランド・レイクとガーネット・レイクの間の山に風が遮られるのか、いつ見ても湖面に波がない。

その先を登ると右手にあるのが、赤茶けた岩肌を湖面に映して輝くルビー・レイク。トレイルから覗き込むとマスの泳ぐ姿が見える。



ルビー・レイク

ルビー・レイクから更に登ると大きな湖が現れる。ガーネット・レイクだ。

サウザンアイランド・レイク同様、湖に孤島を浮かべ、湖面に突き出した半島が美しい。背景のバーナー・ピークは、見る角度が変わるため、少し違って見える。サウザンアイランド・レイクは、広大な湖岸を持つが、ガーネット・レイクは、すり鉢状に狭まり、水深もかなりありそうだ。サウザンアイランド・レイクを「壮大」と呼ぶならガーネット・レイクは「荘厳」という言葉があてはまる。

地図を見ると、この辺りには、たくさん湖がある。いつかじっくりと腰を据え、周辺の湖を巡りたいと思っている。

ヨセミテの境に接するこの地域が、国立公園に入らなかったのが、不思議だ。もしここが、ヨセミテの一部であったなら、バックカントリーの名所になったであろう。ヨセミテのバックカントリーにも、テンレイクスと呼ばれる湖が集まった地域があるが、美しさや大きさでは比較にならない。

トレイルは、ガーネットの湖岸を登りきるとシャドー・レイクまで一気に下る。シャドー・レイクのアウトレットからの水は、滝やカスケ

ード（小滝）になり、サンオーキン・リバーに合流する。そこから、デビルズ・ポストパイル・ナショナル・モニュメントを通り、レインボーク・フォールズとなる。



ガーネット・レイク

「ここは、キャンプ禁止で、シャドー・クリークに戻るか、ロザリエ・レイクに行くかだ。」と、答えた。

シャドー・レイクはキャンプ禁止で、禁止区域の標識は、シャドー・クリークが流れ込む橋の手前に立っている。

そのロザリエ・レイクは、シャドー・レイクから一山越えたところにある。キャンプサイトは、湖岸のトレイルに沿った木立の中。私たちは、湖の中央で、しつかりしたファイヤー・サークルがあるサイトを見つけてテントを張った。到着は、3時半過ぎだった。

先ほどの親子も後から来た。湖岸に沿って移動しながら釣りをしている。息子の方がマスを釣り上げたようだ。

私たちの夕食は、フリーズドライのビーフ・シチューとアルファ米。シチューのほか、スパゲッティ、ラザニア、ストロガノフ、テリヤキといったアメリカ製のフリーズドライ食品を順に食べる。アメリカは、入国時に肉製品を持ち込めないで、現地の*REIで調達する。

キャンプファイヤーの石を動かし、鍋が乗る小さめの炉を作る。ガスが残り少なくなったので、残った燃料は朝食用にして、夕食には小枝を燃やしてお湯を沸かす。多少手間はかかるが、なかなか面白い。

大変なのは、後片付け。すすけて真っ黒になった鍋を、タオルの端に水と地面の砂をつけて磨く。この辺りの砂は、クレンザーのように粒が細かく、煤（すす）がよく落ちるが、手間はかかる。ガスのありがたさが身に染みる。

今では、炎が消えた炭火の上に鍋を乗せる。そうすると鍋はほとんど汚れない。最近のキャンプ用のストーブや鍋は、同じ燃料で当時の倍以上のお湯が沸かせるように省エネが進んでいる。



シャドー・レイク

シャドー・レイクの湖岸で釣りをしている親子がいた。彼らに、「ここでキャンプサイトを見なかったか。」と、聞かれた。

*REI（アール・イー・アイ）通信販売が主で全米に店舗を持つアウトドアショップ。日本でも購入可。 www.rei.com
Day 4, Rosalie Lake
Elevation 2,840 m
7 miles (11.2 km) from
Thousand Island Lake

Day 5 レッズ・メドウ

夜明け前のロザリエ・レイク。波ひとつない湖面をかすめるように飛ぶ小鳥。その鳴き声がこだまする。

ロザリエ・レイクから少し登ると、森の中の小さな湖、グラデイス・レイクがある。トレイルを離れて、湖に沿って左に行くとマンモスの山々を展望できる岩場に出る。

真下には、アグニニュー・メドウスからのリバー・トレイル、正面の山の斜面には、パシフィック・クレスト・トレイル（PCT）がある。右手の遠方には、マンモス・スキーリゾートの山とその頂にある展望台、そこへ行くゴンドラのケーブルが見える。

PCTは、ツオルムン・メドウスからホイットニーの近くまで、ほぼJMTと同じトレイルだが、サウザンアイランド・レイクから少しの間は、谷を挟んで別の道を通る。

JMTは、湖と森の中を、PCTは、バーナード・ピークの遠景を見ながら、峰の斜面の開けたトレイルを行く。2つのトレイルはこの谷の先、デビルズ・ポスト・パイル・ナショナル・モニユメントのソーダ・スプリングで合流する。



グラデイス・レイク

グラデイス・レイクからミナレット・クリー

クまで、退屈な森の中のトレイルを3マイル下る。下り坂でも、ここは歩きやすい。急な下りは脚に負担がかかるが、ここは、比較的なだらかで距離も短い。

ミナレット・クリークを渡ると、左手に急な川の流れが岩を伝わっていくカスケード（小滝）がある。この先で滝（ミナレット・フォールズ）になっているのだが、滝はトレイルからは見えない。これを見るならば、この先のジャンクシオンからPCTを北に0.5マイルもどる。

デビルズ・ポストパイル・ナショナル・モニユメントは、六角形の柱状岩石の集合体とレインボー・フォールズを含む南北3km、東西500mの地域。レインボー・フォールは、夏場でも水が多く、広い滝口から落ちる水が水煙となり、光線の具合で虹が見える。

ミナレット・クリークを挟んで柱状岩石の山の反対側を通る。ここからでは、柱状岩石はあまりよく見えない。よく見たければ、レッズ・メドウからシャトルバスに乗り、ソーダスプリングスで降りる。

ポスト・パイルを過ぎたところでミナレット・クリークに架かる橋を渡る。そこからJMTを離れ、食料補給のためレッズ・メドウに向かう。この辺りは地図にないトレイルがあり、よく迷うので注意しながら進む。

車道に出てレッズ・メドウのキャンプグラウンドに行く。ここには、バックパッカー専用のサイトもあるが、到着が早かったので通常のサイトに泊まる。料金も二人ならほとんど同じで、いろいろなものがある。バックパッカーサイトに比べ、通常のサイトはテーブルやファイヤー・サークルを占有できる。それに、バックパッカーサイトは、舗装していない車道のすぐ脇にあり、車が通る度に砂埃が舞う。

一般の公共のキャンプ場では、受付はセルフで、空いているサイトに車を置くかテントを張る。案内板にある封筒とタグに、サイト番号、名前、住所、宿泊日数などを書く。現金を入れた封筒からタグを切り取り、封筒は案内板のポストに入れ、タグは、支払った印として、サイトのポストにあるクリップにとめる。よくわか

らなければ、「キャンプホスト」と呼ばれる管理人が入り口のそばのモーター・ホームなどにいるので、教えてくれる。

お昼ごろにテントを張り終え、空のリックを持ってリサプライ品を取りに行く。バックパッカーが途中で食料などを供給することを **Resupply** (再供給) という。ツオルムン・メドウスに続いて2度目のリサプライである。

キャンプグラウンドから、500mほど離れたレッズ・メドウ・リゾートには、ロッジ、レストラン、バックステーション(乗馬のツアーや馬による荷物の運搬を行う業者の厩)、グロッセリイ・ストア(食料雑貨店)がある。

このグロッセリイ・ストアは、リサプライ品を1個につき1ドルで預かってくれる。私たちは、出発の前日ここに立ち寄り、5日分の食料や燃料などを預けた。その段ボール箱をキャンプ場に持ち帰り、リパッケージ(かさばる包装をとり、まとめてジブロックの袋に入れる)して、2個のフードキャニスターに入れた。これまで、フードキャニスターは1個だったが、これからは2個になる。



レッズ・メドウのグロッセリイ・ストア(食料雑貨店)

レッズ・メドウのキャンプグラウンドには、今はなくなってしまったが、天然の温泉を利用したシャワーがあった。入るのに勇気があるほ

どの古い施設であったが、お湯を浴び、洗濯をして、気分爽快になった。

ここでもし、シャワーに入りたければ、私の知っている限りでは、マンモスRVパークというキャンプグラウンドに行く。

レッズ・メドウからシャトルバスに乗り、終点のマンモス・マウンテン・スキーリゾートで、市内へ向かうバスに乗り替える。

RVパークは、マンモス・ビジターセンターの前で、シャワーの料金は一人10ドルだと思う。マンモスは、有名なリゾート地。冬はスキー、夏はハイキング客で賑わう。私たちもバックパッキングの帰りによく立ち寄り、ビジターセンターの裏手の公共のキャンプグラウンド(オールド・シャディ・レスト)に泊まる。

そこをベースに、サウザンアイランド・レイクやレインボー・フォールズへ向かう。大きなスーパーマーケットやショッピングモール、アウトレットもある。

RVパークは、スパやプール、シャワーが付くが料金は高め、RVはレクリエーション・ビルで、日本というキャンピングカーを指すキャンピングカーで来た場合、電気や給排水を接続できるので便利で、最近では、ネットも使えるようになっていく。

午後、バックパッカーのキャンプサイトで日本人のスルーハイカーに会う。彼は、加藤氏の本を読み、JMTを歩くために会社を辞めたという。ヨセミテを訪れ、JMTを歩くうちに、人生観が変わったと話していた。

夕食は、その彼とともに、レッズ・メドウのレストランでとった。ハンバーガーやサンドイッチが主なメニューの小さなレストランだが、味はなかなかよい。このサンドイッチ、「ツナ・メルト」は妻の大好物。ツナと溶けたチーズの組み合わせがなんともいえないらしい。

Day 5, Reds Meadow
Elevation 2,316 m
9 miles (14.4 km)
from Rosalie Lake

Day 6 レイク・バージュニア

午前7時、辺りは明るくなったが、陽の光はまだ届かない。肌寒いレッズ・メドウのキャンプグラウンドを出る。車道の横の牧場では馬が草を食べている。馬も夏は忙しい。これから客を乗せ、レインボー・フォールズやサウザンアイランド・レイクへ向かうかも知れない。

JMTへは、レインボー・フォールズへのトレイルの駐車場を抜け、500mくらいでJMTとPCTのトレイルのジャンクション（分岐点）に出る。そこを左に折れ、南に向かう。

レッズ・メドウから森の中のトレイルを歩く。レッズ・メドウの標高は2300m。森は松などの針葉樹が主で、背の低い広葉樹はクリークや草原の近くに多い。

レッズ・メドウから4マイルで、アンセル・アダムス・ウィルダネスに別れを告げ、ジョン・ミューア・ウィルダネスに入る。アンセル・アダムスはヨセミテを撮り続けた写真家で、ヨセミテ・バレーにギャラリーがある。

お昼には、標高2800mのディア・クリークに着く。木陰にリックをおろして一休み。お昼ごはんは行動食で、休憩の間に、カロリーメイトやのりピーですませる。休憩は、たいていは出発してから2時間後と、お昼頃、そして午後3時くらいの3回であるが、きつい峠道ではもつと休むことになる。

JMTが交差するディア・クリークの川幅は10mほど、浅くて靴のまま飛び石の上を歩ける。渡渉地点の左側にはテントサイトがある。

ディア・クリークを過ぎるとマンモス・クレスト（頂）の山腹に刻まれたトレイルを歩く。右手は、谷間のフィッシュ・クリークを挟んで、シエラ・フォレストの雄大な山並みが広がる。標高は3000mまで上がる。木が乏しい南向きの斜面で、日差しがきつく暑い。ディア・クリークで1リットル入れた水も少なくなる。

トレイルが左に大きく曲がり、右下に深い谷が見えるとそこが、ダック・レイクのアウトレットだ。

ここは、レッズ・メドウから12マイル。川に

沿った広い範囲にキャンプ地がある。ここをダック・レイクのアウトレット、あるいはダック・レイク、と呼ぶ人が多い。

ダック・レイクは、トレイルの北500mにあり、そんなに離れた所をアウトレットと呼ぶのはおかしいが、ダック・レイクから、フィッシュ・クリークへと流れ込むこの川には、地図に名前がない。本来なら、ダック・クリークとしてもおかしくないのだが、クリークの長さが、1.5マイルしかないので、クリークにならないのだろうか。



ジョン・ミューア・ウィルダネスの雄大な山並み

そこで一休みする。日差しを避け、木陰にマツトを広げて横になる。涼しくて心地よいのは最初だけで、すぐに汗が冷え、風があたりと寒くなる。乾燥し、日差しの強いシエラ・ネバダでは、日向と日影の温度は、極端に違う。

体が冷えるのを避け、休憩を早めに切り上げてリックを背負う。

ダック・レイクからのスイッチバックに登る。標高にして100mほど登るが振り返ってもダック・レイクは見えない。

そのままほぼ等高線に沿って1マイル進んで、また下ると、森に囲まれた湖が見えてくる。「パープル・レイク」だ。前回のスルーハイク

は、ここでキャンプした。湖のアウトレットには平らな場所があるがキャンプ禁止。湖岸を探し回り、西岸の中央で、やっと平らな場所を見つけたのだった。



パープル・レイク

私たちは、更に進む。夕刻4時をすぎた頃、レイク・バージュニアに到着。湖岸から50 m離れた木陰にテントを張る。

レッズ・メドウから16 マイル。歩いた距離は、今回の旅行で最長だった。2 個のキャンニスターに入れた5 日分の食料はかなり重かったし、暑い一日であったが、きつい峠越えはなく、わりと順調に歩くことができた。

ここから見るレイク・バージュニアは、低い山を背景に緑の草地に囲まれた遠浅の湖だ。ゆるやかな風に波立つ湖面は、空と同じスカイブルーに輝く。その湖を見ながらコーヒーを飲む。ジョン・ミューア・トレイルを行く者は、毎日すばらしい風景に恵まれる。



フード・キャンニスター



レイク・バージュニア

Day 6,
Lake Virginia
Elevation 3,139 m
16 miles (25.6 km)
from Reds Meadow

Day 7 シルバー・パス

午前7時に出発。今日は距離が長いので、いつもより早く出発したかったが、昨日の疲れのせいか、早起きできなかった。

前回のスルーハイクでは、レッズ・メドウから3回目のリサプライ（補給）地点のレ・コンテ・キャニオンまで6日で歩いた。今回1日短くした分を、この区間で短縮する予定だ。

リサプライを受ける5日目は、リパッケージや休息に半日確保したので、距離を長くできない。そのため前回5日かかった区間を4日で歩くことになる。計算では、一日3マイル長く歩けばよいのだが、実際にはもつと長く歩かなければならない時もある。

今日の3マイルプラスの地点も、ベア・リッジという水のない場所で、そこから2〜3マイル進まないで、水のあるベア・クリークにたどり着かない。しかも、午前中に厳しいシルバー・パスを超えなくてはならない。



早朝のレイク・バージュニア

そんなことを考えて不安になっていると、早朝のレイク・バージュニアの光景が目に入る。陽が昇り始め、太陽の光が遠くの山々を浮かび上がらせた時。波ひとつない湖面には、両側

の岸辺の森とその奥の花崗岩の山が鏡のように映る。水は碧く、濃い。その碧く豊かな水からは、湖の底知れぬ深さを感じる。

昨夕見た草地に囲まれた浅い岸辺の、のどかな風景とは全く違う。ここから見たパープル・レイクは、神秘の湖だ。

私たちは、立ち止まって、しばらく湖を眺めていた。そして、焦る気持ちも、出発時間が遅れたことも、すっかり忘れていた。

フィッシュ・クリークへ降りたところで、昨日会った年配の女性のグループがキャンプしていた。彼女たちは、夕方私たちと同じ方向から、にぎやかにおしゃべりをしながらやってきた。そのうちの何人かは、湖岸の飛び石をうまく渡れずに苦労していた。水汲みのため、近くにいた私は、見かねて手を差し伸べた。

私たちが湖の西側にいたので、おそらく東側にキャンプするだろうと思っていたら、湖を通り過ぎて行つた。どこまでいくのだろうと心配していたが、フィッシュ・クリークまで下りたのだ。だが、ここは、草原に囲まれた蚊の多い場所で、普通ならキャンプを避ける。しかも、レイク・バージュニアから1時間弱の道のり。景色のよい湖畔をキャンプ地に選ぶはずだ。ひよつとしたら目的地はもつと先で、何かあつてここにキャンプをしたのかも知れない。

彼女たちにどこへ行くのか声をかけたが、よくわからなかった。私の知らない地名だったからである。詳しく聞こうと思ったが遠かったし、向こうもテントを片づけるのに忙しそうだったので、早々に立ち去った。

フィッシュ・クリークに沿って1マイル歩くとトレイル・ジャンクション。そこからシルバー・パスへの急な登りが始まる。標高2700mから3100mの森の中のスイッチバックを1時間ほど歩く。森を抜けると、湖とごつこつした岩に覆われた高山地帯に入る。

最初の湖を過ぎると「レイク・オブ・ザ・ローン・インデアン」という長い名トレイル・ジャンクションがあった。ローンは、「ただ一人の、孤立した、寂しい」の意味がある。地図で

その辺りの湖の名前を調べると、その手前の湖が「スクウォー（先住民の妻）湖」。その東には「ウォーリアー（部族の戦士）湖」。ローン・インデアン湖の南には、「パプーズ（先住民の赤ん坊）湖」。シルバー・パスの手前の湖は「チーフ（部族の酋長）湖」と、一帯にはネイティブ・アメリカンの名の湖が集まり、決して寂しくないようだ。

チーフ・レイクを過ぎると峠への最後の登り。峠の手前の北の斜面は、数10 mに渡って雪に覆われ、その雪のトレイルが終わると頂であった。



シルバー・パスの下のスクウォー湖と峠に残る雪

峠には、11時頃着。ヨセミテからのスルーハイカーにとって、シルバー・パス（3300 m）は、JMT最初の峠らしい峠だ。今まで超えたカセドラル、ドノヒュー、アイランドの3つの峠は、峠越えの醍醐味である絶景がない。

ここは絶景である。峠から来た道を振り返ると、チーフ・レイクやパプーズ・レイクの豊かな水が青く輝き、その周囲の小さな湖に続く草地がグレーの花崗岩の岩肌に敷いた緑のカーペットのように美しい。

峠の向こうは、深い谷を挟んで、鋭く尖った

マウント・ミルズ（4068 m）など4000 m級の山が連なる。峠を少し下ると真下になだらかな谷間の丘陵地が広がり、その左に小さな湖、そして、下るにつれてシルバー・パス・レイクが姿を現す。

シルバー・パス・レイクの西は山が迫っているが、東側はなだらかな草原。湖の北側と南側にキャンプに適した場所がある。私たちは3年前にここでキャンプした。美しい湖だ。



シルバー・パス・レイク

シルバー・パス・レイクをお昼ごろ通過。湖のそばでのんびりと休みたいが、先を急ぐ。この谷を降りた後、ベア・リッジという峰を越えなければならぬからだ。

シルバー・パス・クリークに沿って下ると、降りたところが小さな草原「ポケット・メドウ」。シルバー・パス・クリークは、ここでモノ・クリークの支流と合流する。更に1マイル下ると、モノ・クリークの本流となつて、JMTに沿った湖の中で一番大きな「レイク・トーマス・A・エジソン」に流れ込む。

エジソン湖は、東西6 kmで、東岸から西岸までフェリーが通じている。湖の向こうの西岸には車道が通じ、バーミリアン・リゾートというロッジがある。JMTを歩くバックパッカーも、

ここで食料を補給する者もいる。そこには、キャンプグラウンドがあり、シャワーも使えるそう
だ。

以前、シルバー・パス・レイクでキャンプしてモノ・クリークに降りたとき、何組かのディ
ハイクのグループとすれ違った。おそらく、フ
エリーは朝夕の2回出ているのだろう。朝のフ
エリーに乗って、シルバー・パスなどを訪れ、
夕方のフェリーで帰るのだろう。

私たちはバーミオンをリサプライ・ポイン
トにしたことはない。レッズ・メドウを食料補
給地点にしている私たちには近すぎるからだ。

峠から下り切ったところに、エジソン湖への
トレイル・ジャンクションがある。エジソン湖
へは直進するが、JMTは左に折れ、モノ・ク
リークを渡る。そこからトレイルはスイッチバ
ックの繰り返し、急な山越えの道になる。季
節的に湧水が染み出しているところもあるが、
5マイル先のベア・クリークまで水がない。

前回のスルーハイイクでは、このジャンクショ
ンの手前、モノ・クリークでキャンプした。川
の近くによい場所があったからだ。

よい場所とは、まず、余裕をもってテントが
張れる平らな場所とキャンプファイヤーのサ
ークル（石囲み）があり、がけ崩れなど心配が
ない。近くにきれいな水があり、草地から離れ
て蚊が少ない。大きな石があり、荷物を広げら
れる・・・などだ。理想的なキャンプサイトは
少ないが、トレイル・ジャンクションの手前で
見つけたこのサイトは、これらの条件がすべて
そろっていた。だが今回、もう一山越えなけれ
ばならない。午後3時を回ったが、ベア・リ
ッジ越えに挑戦した。

ベア・リッジは峠ではないが、長く厳しい坂
道だ。しかも森の中で、景色は期待できない。
近くにあるエジソン湖も木々の隙間から、ほん
の一部しか見えない。

このスイッチバックは、JMTで一番数が多い。スイッチバックは九十九折れの坂道で、
急な斜面に付けられる登山道だ。ここを通るのは3回目。今回は何度折り返すか数えてみた。
数えてみるとすごい。50を超えてもまだ続く。

80も90も越え、100までは数えたが、100
を超えたあたりで、スイッチバックが間延びし
たり、なだらかになってしまったりしてわから
なくなってしまった。

やつとのことで登り切り道は平らになる。頂
は森の中で、しばらく平らな道を歩いた後、ス
イッチバックの下りが待っていた。疲れ切った
脚に、下りの連続はこたえる。

細い湧水が流れ出ているところがあった。疲
れたので、その辺りでテントを張ろうかと思
ったが、周りに平らな場所がない。やはり、ベ
ア・クリークまで下りることにした。

ベア・クリーク沿いの2マイルは、よいサイ
トがいくつもある。以前は、その中間地点の川
岸にキャンプした。前に、テントを張った場所
が安心できるので、近くに来るとそこまで行く
今回はそんなゆとりはなく、一番先に見つけた
サイトでキャンプすることにした。到着は午後
6時半を過ぎていた。

バックカントリーに限らず、キャンプサイト
では、だれもがきちんと片づけ、ごみを拾って
帰る。だが、このキャンプサイトのサークル
にはゴミが目立つ。紙の燃えかすや針金・アル
ミホイルのかけらなどが散らかっている。JMT
のスルーハイカーは、このようなことをしな
い。おそらく、エジソン湖から近いこともあり、
いろいろな人が訪れるからだろう。

疲れた体でテントを張り、夕食をとり、後片
付け、着替えなどをしてテントに入る。到着し
てから、寝るまで少なくとも2時間は必要だ。
妻は、ファイヤー・サークルがあるところで
は、キャンプファイヤーを楽しむ。だが、この
日は、そんな余裕はなかった。

その夜、私たちは疲れ切っていたが、「やつ
たね。」「歩いたね。」と、満足感に包まれて眠
りについていた。

Day 7,
Bear Creek
Elevation 2,743 m
18.5 miles (29.6 km)
from Lake Virginia

Day 8 セルデン・パス

キャンプサイトを出てから2マイルで、前回キャンプした地点があった。今どんな様子だろうかと見に行くと、平らだった岩の間のスペースは背の高い草に覆われ、最近使われた様子はなかった。



ベア・クリーク

ベア・クリークに沿ってしばらく登った後、トレイルは、クリークを渡る。川を渡ることを渡渉というが、水が多い時の渡渉は大変だ。

大きな川には、橋が架けられているが、小さなクリークでは丸木橋か飛び石の上を渡る。ここは、飛び石の上を歩く。水が多いとそれも水没しているので、靴を脱ぎ、裸足かサンダルで渡る。水深がひざより下でも、流れが速いと足を取られる。ストックを使って支えるが、川の流れに脚を取られてバランスを取るのが難しい。それに、水が冷たい。川の中ほどまで来ると、足がしびれて感覚がなくなる。

実際、渡渉時に滑って怪我をしたハイカーに会ったことがある。このスルーハイクの後の2011年、キングス・キャニオンから入ってホイットニーに登った帰り道のこと。その年は、残雪が非常に多く、どのクリークも雪解けの水

で水かさが増していた。クラブ・ツリーからサンディ・メドウに降りたとき、若いカップルにすれ違った。男性は右手に添え木をし、包帯をまいていた。この先のクリークを渡る時に滑って転び、かばった右手を痛めたという。すでにレンジャーが救援に駆けつけ、彼のバックを背負って歩いていった。私が、

「ホイットニーに行く？」

と、聞くと

「そうしたい。」

と、彼は答えた。

予定通りなら次の日にはホイットニーに登れる距離だ。ゴールを目前にリタイアするのは残念だが、また、来年やればよいことだ。

彼にとつて、幸運だったことは、そこが、クラブ・ツリーのレンジャーステーションの近くだったことだ。おそらく彼らは、通過したハイカーに、レンジャーステーションへの救援を頼んだのだろう。

救出するレンジャーも大変である。キングス・キャニオンのトレイルヘッド（登山口）で、「寝不足だ」と言うレンジャーから、救出劇を聞いた。

昨夕4時、トレイルヘッドから5マイル先の滝で女性が転んで動けなくなつたと、レンジャーステーションに救援の要請があつた。

すぐに数名のレンジャーと共に救援に向かった。歩けなくなつた女性を担架に乗せて運んだが、普通なら2時間くらいの道を6時間以上かかったらしい。やつとのことで、トレイルヘッドに着き、救急車に乗せた。宿舎に帰つたのは午前2時だったと言っていた。

男性が転んだクリークも、女性が怪我をした滝も、決して危ないところではないが、水が多い年は、このような事故の話を聞く。水が多いと、クリークを渡る回数も増えるし、川幅も広くなる。石や岩の上も濡れて滑りやすくなる。疲れてきたり景色に見とれたりして、注意がおろそかになると事故が起こりやすくなる。平気だと思っても慎重に行動することが大切だ。

トレイルは、ベア・クリークを離れて、森の中を登る。森を抜けると勾配がゆるやかになり、

小さなクリークが流れる湿った草原に入る。前方に高い岩場があり、そこを登りきると、正面に見えるのはマリー・レイク。

湖岸に沿って歩くとセルデン・パスのスイッチバックが見える。ここは、標高が高くてキャンプファイヤーはできないが、キャンプしたい湖の一つである。数年前には、この湖の中央でキャンプした。

セルデン・パスのへの登りは、マリー・レイクの南岸から始まる。石の間についた階段のようなトレイルを登ると、湖に角度が付き、上に行くに連れて湖の全容が浮かび上がる。

セルデン・パスから見ると、南側にもよいサイトがありそうだった。マリー・レイクの姿は湖岸からではよくわからないが、セルデン・パスから見下ろすとその美しさに感動する。

南北に長いマリー・レイクは、細長い半島が湖の中央に伸び、湖を南北に分けているように見える。湖の右には、なだらかな山の斜面が湖に向かい、ところどころの草地の緑が、湖の青



セルデン・パスから見たマリー・レイク

と組み合わせるととても美しい。背景には、三角形の山々がいくつも連なり、その上には、カリフォルニアの真つ青な空。

セルデン・パスの登りは短い。湖の風景を楽しみ、何度もシャッターを押しながら登っても30分はかからない。

峠を降りると、ハートの形をしたハート・レイクがあり、さらに下ると双子の湖、サリー・キーズ・レイクスが見える。

サリー・キーズ・レイクスの2つの湖は、大きさも形もほとんど同じだ。北側の細いクリークで2つの湖はつながり、その辺りでは、両方の湖を同時に見渡せる。湖の間にはトレイルが通り、キャンプサイトがある。この先のミューア・トレイル・ランチから近く、日帰りのハイカーや釣り人たちが訪れる。



サリー・キーズ・レイクス

ミューア・トレイル・ランチは、JMTから1マイル離れた山小屋である。ランチへの車道はない。宿泊客はフローレンス・レイクに車を止め、馬で往復する。ランチは、1週間ほど滞在するのが条件で、その間にランプの生活と温泉を楽しむ。

リサプライにここを利用するJMTのスル―ハイカーもいる。指定された方法で荷物を送ると、馬に乗せてランチまで運んでくれる。馬の便が週に一度しかないため、余裕をもって発

送しないと間に合わない。ランチに小さな売店があるが、おみやげばかりで食料品はない。

数年前に、この辺りで三人のハイカーに知り合った。そのうちの一人は、食料が届いていなかったと、翌日の馬の便を待つことになった。一緒にいた仲間、先に出発し、彼は、補給した後、急いで追いつくと言っていた。

彼らは、JMTのスルーハイカーであったが、徹底して荷物の軽量化に努めていた。首からぶら下げたボタン電池のLEDがヘッドランプ代りで、お湯を沸かすにも、固形燃料やペプシの空き缶で作ったアルコールバーナーを使っていた。

プラスチックのシャベルを持っていた私を見て、

「前回のバックパッキングで、私は靴のかかとも穴が掘れることを学んだ。」

と、シャベルは必要ないことを教えてくれた。ランチの近くでキャンプした私たちは、その三人のハイカーに、「クリークの向こうにホット・スプリングスがある。」と聞き、川を渡って行ってみた。

「ホット・スプリングス」と聞いて、河原にある石で囲まれた日本の露天風呂を想像したが、そんなようなものではなかった。草に覆われた水たまりのような池で、水は確かに温かいが、足を入れると泥が無い上がり、中に入る気にはなれなかった。

行き帰りに通ったクリークは、幅が30メートルもあり、膝の近くまである深い水と速い流れで渡るのは大変だった。それに、何箇所も蚊に刺されるし、さんざんであった。

収穫と言えるのは、スプリングの近くで腕時計を見つけ、キャンピンググラウンドで持ち主を探したら、その三人のうちの一人の時計だったことだ。

今回、わたしたちはミューア・トレイル・ランチに立ち寄らず、パイユート・パスへの分岐点にあるサン・オーキン・リバーのキャンプサイトを目指した。

地図にジョン・ミューア・トレイル・キャビンと記されている地点がある。トレイルから少

し離れた森の中に、それらしき小屋はあったが、それが何かわからなかった。そこへ行く道もないため、いつも素通りだ。

標高は、2400mまで下がり、夕方にかかわらず暑い。パイユート・トレイルへの分岐点で、パイユート・クリークを渡る橋がある。前回のスルーハイイクで、この辺りを通過したのは午後、あまりの暑さで水浴びをしているハイカーもいた。私もちようどいいと、帽子に水を汲み髪の毛を洗った。クリークの水はびっくりするほど冷たかったが、髪の毛が乾くまで涼しくてこちよかった。

このトレイル・ジャンクションから北に向かうとパイユート・パスを経てノース・レイクに出る。そこから395号線の観光都市ビショップまで車で1時間ほどだ。私たちは、JMTを南北に分けた歩いた時、ノース・レイクをゴールにしたり出発点にしたりした。峠付近には広大な原野が広がり、その前後に湖がいくつもあ

る美しいトレイルだ。パイユート・クリークに架かる橋を渡ると、ジョン・ミューア・ウイルダネスを離れ、キングス・キャニオン国立公園に入る。

その日は、橋を渡った所でキャンプ。トレイルの左右のブッシュの間に、キャンプサイトがある。すでに何組かのパーティがテントを張っていた。

Day 8 Piute Creek, Elevation 2,450 m
15.5 miles (24.8 km) from Bear Creek

Day 9 エボリユーシオン・レイクス

9日目の朝を迎え、バックパッキングが日常生活となった。16日間の旅行も今日から後半になる。

サン・オーキン・リバーの渓谷の底から真つ青な空を見上げる。今日も晴天であろう。出発してから雨は一滴も降っていない。

深い谷底に流れる川を見下ろしながら、両側に迫る谷間を歩く。トレイルは岩場のごつごつした道と山の斜面の草地をぬける土の道だ。すでに太陽は登っているが、谷底まで差し込むにはまだ時間がある。太陽が真上に来る前に、この先の斜面を登り切ってしまいたい。

地図にはトレイルの左手の丸みを帯びた岩がジョン・ミューア・ロックと記されている。20マイル先には、ミューア・パス。その頂に建つ花崗岩の小屋をミューア・ハット。昨日、近くを通ったのはミューア・トレイル・ランチ。長いジョン・ミューア・トレイルの中で、この辺りにだけ、ミューアに関係する名をつけられたものが集中する。



ジョン・ミューア・ロック（左上の丸い岩）

キャンプを出て3マイルで橋があった。以前この橋の近くでテントを張ったことがある。林の中で、薪の集めやすい場所だった。ほかにも

川に沿ってテントを張れる場所があり、最も広いスペースは、そこから1km先のもう一つの橋の手前だ。その辺りは谷底全体が広くなっている、日当たりも風通しもよさそうだった。

その橋を渡ると、エボリユーシオン・メドウへの急な登りが始まる。急なスイッチバックの中ほどに、エボリユーシオン・クリークの清流が滝のようになって流れ落ちる場所に出る。更に進むとトレイルは、そのエボリユーシオン・クリークに阻まれる。川幅は30メートル、前回のスルーハイクでは水が少なく、靴を履いても渡れたが、今年は深い。膝下くらいある。辺りに丸木橋がないか探したがなかった。仕方なく、裸足になって渡る。

「冷たい！」

冷たいよりも痛い。流れも速く、足を入れると下流に数センチ流される。ストックで足をとられないように支える。中ほどまで来ると、冷たさで足がしびれ、感覚がなくなる。

この冷たさをがまんできなくて、今までのいろ工夫をした。防水のソックスを用意したり、靴ごとビニール袋で覆う方法を考えたりした。でも、万全の準備をした時に限って、川の水は少なく、準備が無駄になった。一番よい方法は冷たさを我慢することだった。

やつとのこととで、渡渉完了。川原の小石で足の裏をあたため、タオルで足を拭く。エボリユーシオン・クリークは、JMTで最も川幅の広い渡渉地点である。

渡り終えた地点は、大きな木がある森。その中に広いテントサイトがあった。木立の向こうのエボリユーシオン・メドウを見渡せるすてきなキャンプサイトだ。エボリユーシオン・メドウは、花崗岩の岩山に挟まれた谷間。谷底は水と太陽の光に恵まれ、草豊かな草原が広がる。

その草原を過ぎ、岩と木立に囲まれたトレイルを抜けるとマククルー・メドウ。ここには、レンジャーステーションがある。

レンジャーステーションは、太陽光パネルの付いたログハウス。

ちょうど、パトロールに出かけるレンジャーに会うことができたが、昼間は不在が多

い。このようなレンジャーステーションは、JMTに沿って何箇所がある。



マクルー・メドウのレンジャーステーション

エボリューション・バレーの奥から再び登りが始まる。森の中の乾いたスイッチバックのトレイルを登る。標高3000mのエボリューション・バレーから300m登ると、目の覚めるような輝きを放つエボリューション・レイクに着く。

エボリューション・レイクは、真つ青な空の下で輝くエメラルド。湖岸には、黄色い花が夏の終わりを惜しむように咲き、あざやかな緑の草地が湖岸を覆っている。奥には、鋭い三角形のマウント・スペンサーが控える。

エボリューション・レイクから、今日のキャンプ地のワンダ・レイクまでエボリューション・ベイスンと呼ばれる水の地域だ。ベイスンは、「盆地」だが、山の中の谷間より幅の広い窪地で、そこには湖やクリークが多い。

この辺りの最高峰は、マウント・ダーウィン(4215m)で、その北には、ダーウィン・グレーシャー(氷河)がある。ここは、ダーウィンに関連し、エボリューション(進化)の名がついたものが多い。

エボリューション・レイクの美しさは、豊かな緑で、3300mの高地にありながら、木立と広い草地がある。湖畔の緑は、湖の美しさを引き立てる。



エボリューション・レイクとマウント・スペンサー (中央)

岸に沿って歩き始めると涼しくなった。寒いくらいだ。数マイル先のミューア・パスから冷たい風が吹き始めた。

エボリューション・レイクを過ぎ、ベイスンを登る。ベイスンの最も高い所にあるのが、ワンダ・レイクだ。

ワンダ・レイクが近づくとも風はさらに強くなる。湖のアウトレットには、風よけの岩がある。テントサイトがある。そこでテントを張ろうと思っていたが、すでに他のパーティがいた。湖岸より少し高い場所に平らなスペースを見つけてテントを張る。

食事の支度を始めても風はやまない。陽が傾いてますます寒くなる。強い風を避け、岩陰にストーブを置き、お湯を沸かす。お湯が沸く間に、フリースからレインコートまで持っていた服をすべて着込んだ。

夕食後、風はさらに冷たくなり、寒さにふるえながら食器を片づける。バックカントリーでは、食事の支度も片づけも、私一人でやる。食



ワンダ・レイクのキャンプ

事の支度といってもお湯を沸かすだけ、片づけも、鍋ひとつと食器ひとつ、それにスプーンが2個。家の台所でやればあつという間に終わる作業だが、ここで違う。熊対策もあるが、周辺を汚さないことに気を配る。

食器の食べ残しは水を少し入れて飲む。そして、ティッシュ・ペーパーで拭き、最後に水ですすぐ。その水は、地面に流すが、ほとんど汚れないようにする。水は河川から30 m以上離れたところに捨てるのが決まりで、もちろん洗剤は使わない。洗剤は環境にやさしいとされている物も含め、どのような物も使ってはいけないきまりだ。

私たちは、タイタニウム（チタニウム）の食器を使う。プラスチック製は、ぬめりがとれにくいからだ。

食器が洗い終わったら水汲み。水筒の水は、消毒液を2〜3滴入れて殺菌する。以前は、ポンプ式の浄水器を使っていたがフィルターの目詰まりや故障が多く、使うのをやめた。小さなごみはコーヒーのフィルターで濾す。

水はテントの中に置く。早朝、テントの外は0度前後まで冷え込むが、中はそれより4〜5℃あたたかい。燃料の節約である。



タ方のワンダ・レイク 正面やや左がミューア・パス

ワンダ・レイクの岸边から、ミューア・パスを見る。傾いた夕日がミューア・パスを照らし、その頂にある三角形のミューア・ハット（頂にある避難小屋）が輝いていた。

Day 9, Wanda Lake, Elevation 3,482 m
16 miles (25.6 km) from Piute Trail Junction

Day 10 ミュア・パス

いつものように夜明け前に起きる。フリースのジャケットにレインコート、下は、ハイキング・パンツにレイン・パンツを重ねる。

かじかむ手でコーヒーを入れ、テントの中の妻に渡す。ミュア・パスの向こうの、まだ姿を見せない太陽が、ワンダ・レイクの西側の山々を照らし始めた。

峠から吹き降ろす風で波立つワンダ・レイク湖の中央から西岸へと波紋が広がる。

午前7時過ぎ、ワンダ・レイクを出発。朝日が徐々に差し込む中、何度もワンダ・レイクに向けてシャッターを切る。

岸辺を過ぎるとミュア・パスへのなだらかな登りが始まる。峠の上の三角形の避難小屋、ミュア・ハットがしだいに大きくなる。

峠の直下は急な登り。斜面に刻まれたスイッチバックを登る。振り返るとワンダ・レイクの真つ青な湖面が、マウント・マクギーを背景にした濃い灰色やうすい灰色の花崗岩の山々の中に浮かび上がる。その青さは、シエラ・ネバダの空よりも、はるかに濃い。ワンダ・レイクは、蒼とか、紺碧とかいう表し方が妥当なくらい濃い青だ。

空は、今朝も雲一つない。来る日も来る日も晴天の日が当たり前のように続く。

前回のスルーハイクでも、一滴も雨はふらなかった。ただ、雨は、降る時には降る。昨年、ヨセミテの北部を歩いた時、一週間に5日雨に降られた。天候が不安定になれば、午後にはわか雨や雷雨になり、そんな日が連続することもある。今年は天候に恵まれている。

乾燥していると快適だ。汗の乾きが早く、肌がべとつかない。何日もシャワーに入れないバックカントリーでは、こんな気候はありがたい。

しかし、よくないこともある。乾燥した日が続くと肌が荒れる。特に唇や指先がかさかさになり、ひび割れたり出血したりする。唇は、常に乾燥した空気にさらされるし、手先は食器洗いなど、水仕事をするからだ。そのため、唇には朝タリップクリームをつける。昼間は手袋を

して乾燥を防ぎ、寝る前に軟膏を塗る。

以前は、半袖、半ズボンで歩いたが、今では、乾燥と強い紫外線を避けるために、長袖や長ズボンだ。つばのある帽子をかぶりサングラスをする。顔や首には日焼け止めを塗る。

真夏に長袖、長ズボンは暑苦しく思ったが、乾燥した気候では、強い日差しが直接肌に当たるよりも快適だ。



ミュア・パスから見たワンダ・レイク

ミュア・パス(3644m)には、キャンプを出てから1時間半で到着。ミュア・ハットの前で荷物を下し小屋に入る。

花崗岩のブロックを積み上げた多角形の壁面と、円錐型の屋根。三角形の屋根までブロックでできているのは不思議だ。どのように積み上げ、ブロックで屋根ができるのだろうか。互いの重さで支え合っていると思うが、どんな仕組みになっているのか、見た限りではわからなかった。

このミュア・ハットは、ハイカーのための避難小屋で、暖炉の上のプレートに、

「ミュア・ハットは、ジョン・ミュアを記念して、シエラ・クラブが国立森林局と共同で1930年に建設。トレイルで嵐に巻き込まれたハイカーの一時的な収容施設で、オーバーナイトのキャンピングとたき火は禁止」

と、記されていた。



ミューア・ハット

ミューア・パスを下りると15分でヘレン・レイク。ワンダとヘレンはミューアの娘の名である。ミューアは、ヨセミテで氷河を発見した後、カリフォルニアで農場を経営し、二人の娘に恵まれた。

ジョン・ミューアが娘たちをウィルダネスに連れて行ったか定かでないが、私は、妻と二人の幼い娘たちと何度もヨセミテやハイ・シエラでバックパッキングをすることができた。幼い娘たちは、湖や川で遊び、夜はみんなでキャンプファイヤーをしたり星を見たりして楽しんだ。娘たちとキャンプ旅行ができたことは、ほんとうにすばしかった。

ヘレン・レイクを過ぎると森林地帯へ下る。レ・コンテ溪谷である。ビッグ・ピート・メドウやリトル・ピート・メドウといった草原を横切り、キングス・リバーの支流に沿って、溪谷の奥へと下る。

今日は、食料などリサプライの日だ。この先のレ・コンテ・レンジャーステーションの近くのキャンプサイトに、夕方荷物が届くことになっている。

そこには正午前に到着。洗濯や昼寝をしながら、パッカー（馬やラバによる運送業者）の到着を待つ。



ヘレン・レイク

着を待つ。

6時過ぎ、ビショップ・パスから馬に乗った若いカウボーイが一頭のラバを引いて降りてきた。ラバの背には白い段ボール箱。我々のリサプライ品だ。

リサプライ品は、食料のほか、ガスカートリッジ、トイレットペーパー、ティッシュペーパー、バンドエイドや軟膏、虫除けのスプレー、電池である。これらは、出発前に車でパックステーションに持ち込んでおいた物だ。

パッカーには、5日間のごみや空の容器、使い終わったガスカートリッジや電池を持ち帰って捨ててもらう。

料金は500ドル。高いが、彼らは馬で7時間かけて荷物を届ける。そして、この近くでキャンプして帰るのは明日。

その労力からすれば妥当な金額だろう。

荷物の整理が終わった後、キャニスターに入りきらなかったドライフルーツやクッキーを食べながら、キャンプファイヤーを楽しんだ。

Day 10,
Le Conte Ranger Station
Elevation 2,655 m
10 miles (16 km) from Wanda Lake

Day 11 マーサー・パス

午前7時過ぎに出発。

レ・コンテ溪谷を1マイル下るとグラウス・メドウという美しい湿原に着く。中央の池には靄（もや）がたちこめ、湿原にうつすらと霜が降りている。私たちのキャンプより標高は低い、溪谷の上流からの冷気がこの湿原にたまったのだ。クリークのそばでキャンプしているパーティが、寒さにふるえながら出発準備をしていた。半時間以上歩いて体が温まった私たちと違い、彼らは相当寒いだろう。

グラウス・メドウを過ぎ、パリセード・クリークに沿ってJMTを進む。

細い谷に沿った登り道は、結構きつい。クリークの流れも速く、あちこちに段差があり、小滝のような急流が見える。その急な登りがひと段落するのが、ディア・メドウだ。

トレイルの右にあるディア・クリークに沿って、細長い草原が続く。草原の中をクリークが枝分かれして流れる。春には、いろいろな花が咲くだろうが、今の時期、花は数えるほどしかない。

そのディア・メドウを過ぎると森に入るが、その森の様子が少し違う。森の奥を見ると黒い木がたくさんある。焼けたのだ。トレイルの両側の木の幹が真っ黒に焦げ、細い枝は焼け落ちている。

二年前にここで、山火事があった。私たちの1回目のスルーハイクの直後だった。私たちは8月22日にここを通過したが、それより一週間遅れて日本の大学生がここを通った。彼が通った直後ディア・メドウが火事になった。メドウの先のパリセード・レイクでキャンプした彼は、立ち上る煙に恐怖を感じたという。

その後、しばらくディア・メドウは通れなくなり、JMTのハイカーはかなりの大回りをしなければならなかった。

火事の原因のほとんどは落雷だ。夏の終わりにになると空気が乾燥し、あちこちで山火事が起こる。風で火の粉が飛び、遠くの森に飛び火することもある。

ディア・メドウを抜けると、正面に巨大な岩の壁が立ちはだかる。その壁の間の急斜面に造られたトレイルがある。ゴールデン・ステアウェイだ。トレイルの工事にかなりの費用がかかったから、そう呼ぶのだという。我々が通過した時も、トレイルの補修作業を行っていた。大な岩がいくつも落ち、トレイルをふさいでいる。彼らは、それらを鉄の棒などを使い手作業で取り除いている。ひとつ間違えば、自分が下敷きになりかねない危険な仕事だ。しかも、空気が薄く、日影がない。

不便な山中に寝泊まりし、大変な仕事をしている彼らに、何か言葉をかけて感謝の気持ちを表したいと思うが、昨日補給し食料が満杯の状況に加え、急な登りと暑さで気持ちに余裕がない。作業中に、道をよけてくれた彼らに「サンキュー」と言うのが精いっぱいだった。



ゴールデン・ステアウェイのある岩場

壁の間が狭くなると登りもほぼ終わり、開けた草原とその奥にある湖が見えてくる。パリセード・レイクだ。

レ・コンテ溪谷から10マイル。日程にゆとりがあれば、ここでキャンプしたいところだ。

初めてここを訪れたとき、湖の西側でテントを張った。その時、ユニークなパーティに会った。夕暮れが近づいた時、マーサー・パスの方から、父親と兄弟らしい三人の子供たちがやってきた。彼らのスタイルは一風変わっていて、明らかに一昔前のリックを背負い、ふつうのTシャツに短パン姿であった。

彼らは、我々から100mほど離れた草原の岩場にリックを下した。そして、たき火をはじめた。大きな鍋でお湯を沸かしているらしい。ここはたき火ができる標高かどうか、あるいは限界ぎりぎりであると思うが、彼らはそんなことにこだわっていない。キャンプ用のストーブを持つてないのだ。それに、テントもなく、岩場に寝袋を敷いている。

散歩中の子供たちと話した。彼らは、ホイットニーを出発しヨセミテに向かう、我々と逆コースで歩いているという。

豪快そうな父親のキャラクターに興味を持ち、あとで、話を聞こうと、子供たちにメールアドレスをもらったが、そのアドレスには送れなかった。



パリセード・レイク

そんなことを思い出しながら、パリセード・レイクの湖岸でエネルギーと水分補給をした。その後、横になり20分くらい昼寝をした。いつも昼寝をしないが、たまにはいいなと思った。午後のマーサー・パス越えに備えて、十分な休養にもなった。

パリセード・レイクスは、同じくらいの大きさの湖が二つある。キャンプに適した場所は、ゴールデン・ステアウエイを登り切った平地で、クリークの両側の草地から湖の西岸にかけて

だ。マーサー・パスに近い方の湖の東側にも平らな場所があったが、急な斜面を下りなければならぬし、トレイルから丸見えだ。

マーサー・パスの標高は3682m。JMTで二番目に高い峠だ。急な斜面に付けられたスリッパバックを、ハイキングストックにもたれかかるように登る。何歩か歩くと立ち止まり、呼吸を整える。

トレイルから振り返ると、のこぎりの歯のようなパリセード・クレストの急峻な峰々と、その谷底に、水たまりのように小さくなったパリセード・レイクスが見える。



パリセード・クレストとパリセード・レイク（峠の北側）

マーサー・パスへの最後の数百mは直線。荷物の軽い妻は、私より先に着き、私が歩く姿をカメラに収める。

午後3時40分ころ、マーサー・パスに到着。峠の向こうは大平原。広大な谷間の底の平地にいくつもの小さな湖がある。湖の水は、信じられないほど美しく、湖底がはつきり見えるくらい透明である。湖の間のすこし高くなったところにトレイルがあり、その先の森の中へと続いている。さらに、その森の向こうに湖が小さく見える。明日超えるピンショット・パスのふもとの「レイク・マジョーリエ」だ。



マーサー・パスからの眺望（南側）

マーサー・パスは、JMTで最も美しい峠と
いってよい。北側には、パリセード・マウンテ
ンとパリセード・レイクスの眺め、南側は、湖
と大平原。そして、レイク・マジョーリエまで
見渡せる雄大な視界。

私たちは、ゆつくりと景色を楽しんではいら
れなかった。夕暮れが迫ると風が急に冷たくな
り、体がすぐ冷える。この下の湖は、きれいだ
が、峠から吹き降ろす風が強く、ものすごく寒
い。少し無理をしても、標高が低く風の余り当
たらぬ場所まで行かなければならなかった。
峠の向こうは急なスイッチバック、その途中
の雪の上で、転んでしまった。慎重に歩いてい
たつもりだったが、疲れて足が踏ん張れなくな
ったのと、JMTを2回歩いたブーツの底がす
り減っていたからだ。しりもちをついて、「痛
てて！」と、叫ぶ私の姿を妻は笑いながら写真
を撮った。

前回キャンプした最初の湖を通過した。今回
はそこより2マイル進んでキャンプ地を探す。
クリークに沿って谷川に降りると、低い松の木
に囲まれた傾斜地の下に、大きな石があった。
石のそばにテントを張れるくらいの平らな場
所があり、そこにキャンプすることにした。

到着してテントを設営する。妻は着替えて洗

濯をする。わたしは、その洗濯物を干すロープ
を張り、コーヒーを入れた後、食事の支度をす
る。

食事の後片付けが終わる頃には、すっかり日
はかげり、急に寒くなる。私の着替えは、最後。
今日のように到着が遅くなると、濡れたオルで
体を拭くのも寒い。着替えて寝袋に入ったのは
9時。

今日は、6日分の食料で重くなったリックを
背負い、ゴールデン・ステアウエイとマーサ
ー・パスを超えることができた。今日も疲れた
が、それをほるかに上回る満足感に包まれ、眠
りについた。



キャンプからマーサー・パス（中央のくぼんだ所）を見る

Day 11, South Fork Kings River
Elevation 3,240 m
17.5 miles (28 km) from Le Conte Canyon

Day 12 ピンシヨット・パス

バックパッキング中は、午前5時に起きる。

早く目が覚めても時間まで寝袋の中で温まる。5時になると着替え、ジャケツを着こんで外に出る。外はまだ暗くヘッドランプの明かりを頼りにお湯を沸かす。夏時間のカリフォルニアでは6時をすぎないと明るくならない。私が外に出ると、妻が着替えを始める。テントの中は狭くて二人同時に着替えられないからだ。

コーヒーが入った頃、朝焼けが始まる。妻はいつもテントの中でコーヒーを飲むが、私は朝焼けを見ながら飲む。寒いが美しい朝焼けを見ながら飲むコーヒーは最高だ。

食事の後片付けを始めるころに陽が昇るが、その頃が一番寒い。昨夜から外に置きっぱなしのバケツの水。調理をするときはなんでもなかった水に、薄氷が張っている。氷をわって食器を洗う。冷たくて手が痛い。

テントのフライシートを乾かそうと岩の上に広げた。たたむとき、水滴はシャーベット状の氷になっていた。

ここには一日のうちに四季がある。昼間は汗ばむくらいに暑い夏で、夕方には秋の涼しさが訪れる。早朝は真冬で、水が凍るほど寒い。出発する頃、太陽が昇ると気温は急に上がる。朝日を浴びる時は春である。

その暖かい陽の光の中、キャンプ地を離れ、ピンシヨット・パスを目指す。トレイルは昨夕見た森の中へと下り、その先の谷間からレイク・マジョーリエへの登りに入る。

マジョーリエの手前の湖のほとりで一休み。エネルギーの補給をする。午前7時に出発して二時間歩いた。調子がよいときは、二時間くらい連続して歩く。休憩は30分ほどで、その間にカロリーメイトなどを食べたり水を飲んだりする。地図を見て現在地の確認もする。

休憩時間が多いと移動する速度は遅くなる。峠道では、水分補給を何度も行い、景色のよい所では立ち止まって写真を撮る。クリークや湖で水を汲む時間も必要だ。いろいろなことを含めると、私たちの「速さ」は、一時間に1.4か

ら1.5マイル。朝七時から夕方五時までの10時間に14〜15マイル移動できることになる。

荷物を軽くすることで、休憩も少なくなる。ベテランの人は、水と食料以外の重さを9 kgに抑えるという。数日分の食料と水を加えても15 kgだ。15 kgは軽い。一度に長く歩け、登りも楽だ。何よりも歩きを楽しむことができる。

反対に荷物が重いと担ぐだけで大変。登りは脚が上がらなくなるし息が切れる。下りは膝に負担がかかる。

荷物を軽くする方法は、最新の軽量化された道具をそろえることと、不要な物を見極める経験とそれを省く勇気だ。

「勇気」は、いつも失敗する。持っていないつもりでも、直前になると「やっぱり持っていた方が」と、リックに詰めてしまう。反対に、持たなくて後悔したことはない。



レイク・マジョーリエ

坂を登り切ると、レイク・マジョーリエに着く。美しい湖だ。湖のアウトレットからトレイルに沿った湖岸にキャンプに適した場所がある。数年前にここでキャンプした時は、アウトレットに先客がいたので、山側の高台でキャンプした。湖を見渡せる景色のよい場所だった。

マジョーリエからの登りはさらに厳しい。ピンシヨット・パスの標高は3688 m。息が荒くなり、立ち止まって呼吸を整える回数が増え

る。振り返ると、レイク・マジョーリエが、マウント・ピンシヨットのなだらかな山裾に隠れるように小さくなっていた。

ピンシヨット・パスは、両側に鋭く尖った二等辺三角形のような岩壁がある。先に来た妻が風をよけるように岩陰で休んでいる。登りでこちよかった風も、立ち止まれば冷たく感じる。汗が冷えるのを避けるため、風のあたらない陽だまりのような岩陰に腰を下ろす。

峠の南側には、小さな湖と草地が点在する。正面やや右の鋭い峰を持つ山は、マウント・セドリック・ライトで、標高は3700mを超える。ここから見えないが、そのふもとにこれからそばを通るツイン・レイクスがある。トレイルは、谷底の小高い丘にあり、峠を下る二人のハイカーの姿が見えた。



ピンシヨット・パスからの眺め

このピンシヨット・パスの峠の南東側の風景と、昨日のマーサー・パス、そして、二日後に超えるフォレスター・パスの南東側の風景は少し似ている。峠から見下ろすと、どちらも湖のある平原であり、クリークや湖に沿った草地と遠くの森が見える。昨日のマーサー・パスは、JMTで「最も美しい」と書いた。比較すると、フォレスター・パスからの風景は「壮大」。このピンシヨット・パスからの眺めは、「雄大」なロックガーデンである。

峠を下りる。急なスイッチバックを過ぎると、中央に盛り上がった岩場の上を通る。その左側には小さな湖、右にはクリークとメドウがある。トレイルは、最初は左側の湖に近づき、次にクリークに沿ったメドウを抜ける。マーサー・パスやフォレスター・パスより規模は小さいが、自然が造った庭、おもしろいと感じられるのがピンシヨット・パスである。

そのピンシヨット・パスから見たトレイルを歩き終えると、左側にツイン・レイクスへのトレイル。そして、ソウミール・パスへのトレイル・ジャンクションがある。ここが変わった案内板があった。アルミの板に髭のジョン・ミューアの顔が彫られているのだ。左手を髭につけて何やら思慮にふけっているジョン・ミューア。なかなかの傑作だ。



そこから、ウッズ・クリークのトレイル・ジャンクションまで長い下りが3マイル続く。途中、トレイルから遠望できる滝がある。地図にはフォールズとしか記されていないが、落差10mくらいの滝だ。

更に下るとウッズ・クリークのトレイル・ジャンクションに出る。そこを左に折れ、細い木製の吊り橋を渡るとフード・ロッカーのあるキャンプサイトがある。今夜はここでキャンプ。

ここは標高も低くて暖かい。到着も4時過ぎと早かったので、ゆっくり洗濯ができた。

そして薪を集め、キャンプファイヤーをしながらのんびりとキャンプの夜を楽しんだ。

Day 12, Woods Creek
Elevation 2,588 m
14 miles (22.4 km) from
South Fork Kings River

13日目の朝を迎えた。長いと思つた16日間も、すでに4分の3が過ぎ、残り4日となつた。

隣には、遅くなつてから男の二人組みがやつて来た。彼らと初めて会つたのは、マーサー・パスで、私たちを追い越した後、峠道にあつた小さなクリークでお湯を沸かしていた。それで、私たちが先にマーサー・パスを下つたが、どこかで、彼らが先行したようだ。ピンショット・パスから見えた二人連れは、彼らだつたようだ。到着してからの彼らの行動は、私たちと少し違つた。まず、ベア・キャニスターの中身を出し、そこに水を入れて洗濯を始めた。そうか、ベア・キャニスターもバケツになるんだと、勉強になつた。それから、お湯を沸かすようなことはせず、食事は、スナックをかじるだけだつた。それに、テントなしで寝袋だけで寝ていた。

シエラ・ネバダでは、雨が少なく、乾燥して夜露が少ないため、テントを持たない人は珍しくない。テントのない分の荷物は軽くなるが、テントの中と外では、温度が4〜5℃違う。その分ダウンジャケットとか、しっかりした寝袋が必要だ。それに、もし雨が降つた時のために、ターフも準備することになる。朝夕蚊の大群が押し寄せることを考えると、テントの方が便利だが、今年のように蚊が少ない年は、星空の下で寝た方が気持ちがよいのだろう。

私たちは、午前7時過ぎ、その二人より早く出発した。ウッズ・クリークから登りで、シエラで最も美しいといわれるレイ・レイクスなど、きれいな湖を巡りグレン・パスを超える。

最初に訪れたのは、小さなダラー・レイク。2年前には、ここでキャンプした。

ダラー・レイクは、小さいが深い湖。深くても下までよく見え、大きなマスが泳いでいる。次のアローヘッド・レイクも美しい。近くからではわからないが、トレイルの高い所から見るとやじりのような尖った形をしている。湖岸にはキャンプサイトがいくつもあり、周りの木立や草地の緑、そして、空の碧さを映した湖面が美しい。



レイ・レイクス

私たちが最初にレイ・レイクスを訪れたとき、



アローヘッド・レイク

その次のレイ・レイクスはもつと美しい。なぜ「美しい」と感じるか、最初は分からなかつた。写真に撮つて比べると、レイ・レイクスの周りには緑が多い。

湖の周りは花崗岩の山であるが、中腹まで木に覆われている。岸边には八月でも緑が豊かだ。水と空の青さに加え、豊かな緑が湖の美しさを引き立てる。

ミドル・レイ・レイクの湖畔でキャンプし、半日の休養を楽しんだ。

近くには、三人の男性のパーティがいた。彼らは、釣りをしながら一日中のんびりと過ごしていた。彼らもテントを持たずに寝袋だけで眠り、最新の道具というより、ちよつと薄汚れた古いスタイルのバックパッカー姿であった。

翌朝、私たちが湖畔で写真を撮っていたら、その中の一人が、シャッターを押してやると来た。彼は、二人の息子と来ているという。そして、ロサンゼルスに住んでいるからと、仕事先の電話番号を教えてくれた。

ロサンゼルスに着いて電話したら、昼食を一緒にということになった。教えられたオフィスは、立派なビルの中、彼は、スーツに身を包んだ弁護士であった。



グレン・パスからの眺め

レイ・レイクスを後にし、グレン・パスの急坂を上る。弁護士のフェترونさんの息子には、彼が来日した時に再会した。父親のフェترونさんは、街中ではさつそうと歩くが、重い荷物を背負った峠道では、かなりおくれる。そんな時、彼の兄は、先に行つて峠に自分の荷物を置く。そして、引き返して父親のリックを背負つて登るという。

そんな彼ら一家がうらやましく、いくつになつても父親と出かける息子たちを持ったフェ

テロンさんは幸せだと思った。

今までバックカントリーで、たくさんの人に出会った。そこで知ったことは、ウィルダネスを愛する人は、知識や教養を身に付けた人であるということ。その人たちは、自然を保護することやその中で過ごすことの大切さを知り、そのためのルールやマナーを守ること誇りをしているのだ。

そのグレン・パス。峠の直前のスイッチ・バックはかなり急だが長くない。むしろ、ここからビデット・メドウへの下りが、急でつらい。1マイルも下ると、かなり膝に負担がくる。

右下に、森に囲まれたシャーロット・レイクが見え隠れする。そこを過ぎると、キアサージ・パスへのジャンクションがある。

三年前にここで苦い目にあつた。リサプライを頼んだパッカーにいい加減な仕事をされたからである。

私たちは、ここでパッカーと12時に待ち合わせた。30分前に到着し、パッカーを待っていた。が、約束の12時を過ぎて来ない。そのうち1時を過ぎ、2時になった。

しびれをきらせた私は、妻と子供をジャンクションに残し、キアサージ・パスの方へ行つた。そこには、峠へ続く馬の足跡があつた。最新の足跡は、峠へ向かっている。彼はすでに帰つたのだ。ひよつとしたら、彼は、約束の時間に我々が現れなかったときに、この下のシャーロット・レイクのフード・ロッカーに置いておくというオプションを、何らかのついでに実行したのかも知れない。

私は、空のリックを背負い、二人をジャンクションに残してシャーロット・レイクへ降りて行つた。

レンジャー・ステーションでフード・ロッカーの場所を教えてもらう。レンジャーは私の名前を知っていたので聞くと、パッカーが昨日来て置いて行つた箱に私の名前が書いてあつたからだという。

その段ボール箱をリックに詰め、ジャンクションに戻る。補給品が手に入つて一安心だが、4時間もロスしてしまつた。

約束違反をした。パッカーへの怒りは収まらなかった。前日にフード・ボックスに置いたら、トレイルジャンクションの標識にメッセージを残せばよいではないか、あまりにも無責任だ。ビショップに帰ってから電話で抗議をしたが、「オプシヨンの一つだ。」と、とぼける。知り合いのパッカーを通して話をすると、半額返金するとメールで言ってきた。ビショップに住む私の知り合いに半額を届けると約束したが、とうとう実行されなかった。

そのパッカーのうわさはよくない。一度了解した仕事を勝手な理由をつけてキャンセルされたとか、金融上のトラブルをたくさんかかえているとかだ。東シエラでは、パッカーごとに受け持ちの区域が決まっている。それ以来ここでのリサプライはやっていない。



シャーロット・レイク

ビデッド・メドウまで下りると、キングス・キャニオンのセダー・グローブへのトレイルジャンクションがある。2011年、私たちが4度目のホイットニー登頂を果たした時、ローン・パインへの下山枠が一杯で、セダー・グローブから6日で往復した。フォレスター・パスやビッグホーン・プラトールなど、JMTのクライマックスを楽しめるコースだ。

ビデッド・メドウには、豊かな草原と森、清流があり、ファイヤー・サークルとフード・ロッカーのあるキャンプサイトがいくつもある。キングス・キャニオンでは、フード・ロッカーがあちこちに設置され、事前に調べて行けば、キャニスターを持ち歩かなくてよい。

キャンプファイヤーを楽しむならビデッド・メドウがよかったが、明日超える標高4023mのフォレスター・パスに備え、少し距離をかせいだ。ビデッド・メドウから2マイル進んだところに平らなスペースを見つけ、そこでテントを張った。

キャンプの脇にはバブズ・クリークがあり、豊かな清流が岩の上を滑るように流れていた。



キャンプ脇のバブズ・クリーク

Day 13, Bubbs Creek,
Elevation 3,100 m
12 miles (19.2 km) from Woods Creek

バブズ・クリークのキャンプを出てしばらく行くと、ウッズ・クリークで隣に泊まった例の二人がトレイルの脇のキャンプサイトで出発準備をしていた。

そこから1時間ほど歩き、上着をぬいでいるときに、彼らに抜かされた。歩くスピードは、私たちよりかなり速い。

フォレスター・パスは、JMT最大の難所。4000m近い峠道で、薄い酸素の中、すぐに息が切れる。疲れてくると100歩も歩かないうちに立ち止まって呼吸を整える。私たちは、登るまでに何度も休み、水分や栄養を補給する。途中のクリークで水を汲む必要がある。しかし、彼らを見ていると、休んでも立ち止まってもない。同じペースでどんどん歩き続け、私達との距離は広がるばかりだった。

不思議なことに、疲れた体とは反対に気分の高まりを感じることもある。何歩か歩いただけで立ち止まりなくなるようなときも、高い段差を登れないようなときでも、気分はさわやかなのだ。これを、「ランナーズハイ」と呼ぶのだろうか。JMTでも特に厳しいフォレスター・パスへの登りやホイットニーへの登りでそんなことを感じる。

フォレスター・パス直下のトレイルは、バブズ・クリークのフード・ボックスのある最終キャンプサイト（キングス・キャニオン国立公園の主なキャンプ地には、フード・ボックスが設置されている）を過ぎると、峠に向かって左側に迂回する。正面に巨大な岩山の壁があるからだ。その壁が低くなっている左側の岩場を登り、岩山の上に出る。そこからクリークに沿って登り、最終の湖をすぎて岩山の上の尾根の中央を進む。最後に、峠の真下につけられたスイッチバックを登る。

一番苦しいのが、尾根の辺りだ。なだらかうに見えてもきつい。峠の真下の最終のスイッチバックになると、ゴールが見えるため、力が出る。そこから見上げると、すでに、頂を極めたハイカーが休みながらこちらを見下ろして

いる。そんな立場に早くなりたいたいと頑張る。



フォレスター・パスへ 最後の登り

フォレスター・パスには、10時半に到着。フード・ボックスのある最終キャンプを過ぎてから2時間と少しだった。

今年はトレイルに雪がなかったが、もし雪があればもつと時間がかかる。峠の上半分が雪に覆われていた2011年は、同じ場所から3時間以上かかった。急斜面に雪があると、足を取られて思うように歩けないし、余分な体力を消耗する。

フォレスター・パスの頂には、「セコイア国立公園、フォレスター・パス 標高13200(4023m)フィート」のしっかりとした看板がある。

その看板の向こうは、絶景である。V字型の峠の前には、壮大な谷間の光景がある。

左側にダイヤモンド・メサ（頂上が平らで急な側面を持った独立した丘）の岩壁。その下に大きな湖が2つ。中央に平地とその右のなだらかに盛り上がった丘、その丘の上の小さな湖、そして、右側には、カルテック・ピーク（4216m）と、その山裾。

遠くの谷間には森が見え、そこからお椀型に盛り上がった丘が、ビッグ・ホーン・プラトール（台地）だ。

最初に来た時、ここからホイットニーが見える

のではないかと探したが、ホイットニーは、左側のダイヤモンド・メサの影になり見えない。峠の真下には、目もくらむような急傾斜につけられたトレイルがある。あきらかに、峠の南側の方が急である。岩壁を削るだけでなく、かなり下から石を積み上げた部分もある。どうやって、こんな崖に石を積んだのかと、感心する。



フォレスター・パスからの眺め（南側）

峠の北側に腰を下ろす。北側の風景は、南側ほど雄大ではないが、シエラ・ネバダの峰々の重なりが続く。

水を飲み、カロリーメイトやのりピー、さきいか、ドライフルーツ、いつもの山での携帯食が最高においしい。

下を見下ろすと、登って来るハイカーが点のように見える。何度も立ち止まっている人もいれば、どんどん登って来るハイカーもいる。

例の二人組は、すでに峠を降りていた。私たちも30分ほどで峠を降りた。

下り始めは、足がすぐむほど急な崖、その後は、単純なスイッチバックの繰り返しだ。約30分で、下の平地に着く。そこからまっすぐに進むと、上から見た大きな2つの湖の右を通って、谷間へ向かう。一度、この湖のほとりでキャンプしたことがある。夕方になって、急に寒くなった。峠から吹き降ろす風が、ものすごく冷た

いからだ。

その湖地帯を過ぎると、広大な谷間に出る。左手には、ダイヤモンド・メサに遮られて見えなかったホイットニーが、初めて姿を現す。

ここから見たホイットニーは、左側が急な岩壁で、頂上から右はゆるく長い傾斜のある姿をしている。円いケーキを8分の1にカットし、その中心を頂にしたような形だ。



フォレスター・パスを下るとホイットニーが姿を見せる

ところが、ふもとの町、ローンパインからは、鋭く尖った峰の方から見るため、ずいぶんと感じが違う。それに、ローンパイン側からは、他の鋭い峰々が重なり、どれがホイットニーかわからない。特に、手前にあって高く見えるローンパイン・ピークがホイットニーと思えてしまう。

私は、ホイットニーが見えるこの景色が好きだ。谷間に広がる大平原は、果てしない広さを感じる。それを見ながら歩くこの場所は、アメリカそのものだ。ここを歩くと、「日本にこんなところがあればいいな」と、いつも思う。

フォレスター・パスからの下りは、タインダル・クリークまで、3マイル続く。連続した下りは脚に応えるが、クリークまで下ると、フード・ボックスを備えたキャンプサイトがある。

長い下りで疲れた脚を癒すのにちょうどいい休憩ポイントだ。

タインダール・クリークに着くと、例の二人組がいた。キャニスターから出した食料をしまっている。ブーツを脱いで川で足を洗っている。キャンプするには、早すぎる。ここ数日の様子から、彼らは、お昼にお湯を沸かし、ディナーを食べる。そのあと、ゆっくり休憩をする。昼寝も入れて昼休みを2時間をとっている。朝はゆっくり起き、夕方は遅くまで歩く。昼は、お湯を沸かすが、朝夕の食事は、スナックやエナジーバーで済ましている。

私は、以前ベルギーへ行った時のことを思い出した。そこで驚いたことは、昼間にラッシュアワーがあることだ。お昼になると、みんな家に帰って、家族でディナーを楽しみ、再び職場や学校に戻る。昼休みは2時間あった。そして、朝夕の食事は、スープ以外は温かくない簡単のものだった。彼らは、そんな習慣をもつ国の人も知らない。

タインダール・クリークを過ぎ、ビッグホーン・プラトーの丘に登る。丘に登るに連れ、ホイットニーの姿が現れてくる。プラトーの中央には丸い湖。草地のあちこちにある穴から、マーマットが顔を出す。

その夜のキャンプ地、ウオレス・クリークに例の二人組がやってきた。私達より、かなり遅かったので、彼らに、

「ここによいキャンプサイトがある。」

と、声をかけた。彼らは、

「ホイットニーからの長い下りがいやだから、(それをさけるために)まだ2時間ほど歩く。」という。

ホイットニーから・ホイットニー・ポータルまでの下りは、サウス・バウンド(南行)で最も急で長い、下りの難所だ。

私たちは、明日ホイットニー直下のギター・レイクでキャンプし、明後日、午前9時に登頂する。その後、ポータルまでの連続9マイルの下山路を一気に下る。

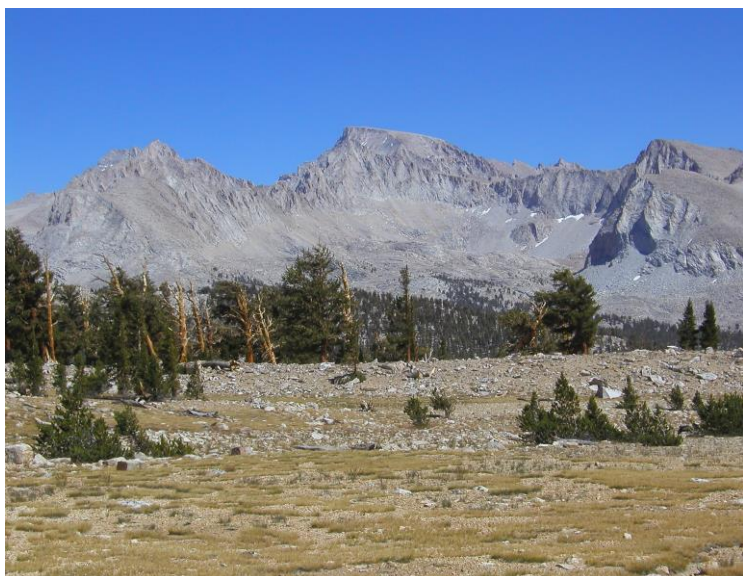
長い下りをさけたいという彼らは、明日の午後に登頂する。そして、山頂から4マイル下り

て最初のキャンプに泊まり、最終日の下りを5マイルにするのだ。

それから、彼らに会うことができず、詳しい話は聞けなかった。



ビッグホーン・プラトーと中央の湖



ビッグホーン・プラトーから見たホイットニー (4,418m)

Day 14,
Wallace Creek
Elevation 3,250 m
14 miles (22.4 km)
from Bubbs Creek

Day 15 ギター・レイク

朝の冷え込みには慣れていたが、今朝の冷え込みは一段と厳しかった。

朝食を終えてクリークに水を汲みに行くと、川岸の草にかかった水しづきが凍り、葉全体が細長いアイスキャンデーのようになっていて、濡らしたタオルも石の上に置いたら、そのまま凍って、持ち上げても、形はくずれなかった。

ウォレス・クリークを出て、一山越えるとサウディ・メドウ。細長い草原を横切り、もう一山越える。降りたところに、トレイル・ジャンクションがある。レッズ・メドウから同じ道を通ってきたPCT（パシフィック・クレスト・トレイル）とJMTの分岐点だ。PCTは直進で、メキシコ国境まで続く。JMTは左に折れ、ホイットニーに向かう。

クラブツリーには、レンジャー・ステーションがある。木に遮られてよく見えないが、クリークに沿って、キャンプできる場所もあるようだ。

ここを左に折れ、ホイットニーに向かう。森林限界の高さにあるきれいな湖はティンバーライン・レイク。水草の生い茂る湖岸から、ホイットニーの後ろ姿が見える。



ティンバーライン・レイク

そこで一休みした後、ギター・レイクに向かう。ギター・レイクは、ギターの形をした湖で、私たちは、そこをホイットニーへの最終キャンプとしている。

ホイットニーへの登り方はいくつかある。日の出を見たければ、午前2時前に出発する。水や防寒具を持って山頂でキャンプし、日の入りと日の出を見る人もいる。

私たちは、夜明け前にギター・レイクを出て、9時頃に登頂。ホイットニー・ポータルまでの長い下りを一気に下る。

ギター・レイクの標高は3480m。ホイットニーは4418mで、その差は1000m。標高差も大変だが、薄い酸素に苦勞する。ゆっくり歩かないと息が続かない。

ここまでJMTを歩いてきたハイカーは、毎日の厳しい峠越えで相当疲れがたまっている。ギター・レイクは、そんなハイカーが翌朝の登頂に備えて体を休める場所だ。

私たちも、正午頃にギター・レイクに着き、午後はゆっくりと昼寝や散歩などをして過ごし、明るいうちに寝袋に入った。



ギター・レイクから見たホイットニー

Day 15, Guitar Lake
Elevation 3,480 m
7 miles (11.2 km) from
Wallace Creek

Day 16 ホイットニー

午前4時に起きる。寒さの中、コーヒーとカロリーメイトの簡単な食事をとる。午前4時45分。ヘッドランプをつけて出発する。

ギター・レイクは広い。周りに10組くらいキャンプしているはずだが、それぞれの様子は暗くてわからない。私たちの近くにいた年配の男性は、自分はコーストガード（沿岸警備隊）で、日本にも行ったと話していた。テントの脇を通ったが、彼は、まだ眠っているようだ。

上を見ても、ヘッドランプの光は見えないので、私たちより先に出発したパーティーはいないようだ。

ギターの箱の部分を過ぎると、登りが始まる。初めは、メドウの中を通るならかな登りが1マイル。次に石を積み上げた急なスイッチバックがホイットニー・トレイルの分岐点まで続く。周りが明るくなり、ギター・レイクより上の湖でテントを張っていたパーティーの出発準備をする姿がよく見える。

スイッチバックの中間地点で、標高4000mを超える。息が苦しく、数歩進むと立ち止まりたくなる。石のステップがあると、段差が低いところに足をかける。一気に高い段を上ると苦しくなるからだ。連続して歩き続けることもできない。スイッチバックの折り返し点で休み、息を整えてから登り始める。妻は、高度の高い所が得意で、私より数10m先に行く。



ギター・レイク

午前6時。そろそろ日の出だ。西側の斜面を登っているため、日の出は見えない。遠くの山の頂が朝日に照らされ、輝き始める。真下には、

大きな双子の湖、ヒッチコック・レイクス。その湖面に明るくなりはじめた空が映し出される。

6時半過ぎ、マウント・ホイットニー・トレイルとの分岐点に着く。ここに荷物を置き、カメラと水、行動食をウェストポーチに入れる。ここからは峰に沿った道で楽になる。下には、キャンプ地のギター・レイクがよく見える。上からみると本当にギターの形をしている。

トレイルのすぐ下のテントサイトでは、二人組がテントをたたんで出発準備をしている。

所々にある狭い階段状のトレイルでは、慎重にステップを踏む。トレイルの途中、東側が見える場所から覗き込む。西側の斜面も急だが、東側は垂直に近い断崖で、足がすくんでしまう。

山の東側には朝日が当たり始めたが、トレイルのある西側には日が当たらず、谷から吹き上げる風が冷たい。ストックを持つ手が冷たくて、夏用のハイキング手袋は寒さよけにならない。

峰伝いの最終トレイルは1.5マイルだが、標高差は300mあり、思ったより時間がかかる。午前8時前、ようやく山頂が見えてきた。



ホイットニー山頂（中央奥の平らな部分）付近

山頂の東は垂直だが、頂は、ならかな斜面だ。トレイルは、山頂から離れるように山裾に

迂回し、なだらかな西側から登る。

そのトレイルの日影に雪のかたまりがあった。谷側は高さが1m、山側は私たちの身長より高い。その間の、人がやっと通れる幅を左右の雪に触れながら歩く。



山頂の避難小屋

次は、スイッチバック。なだらかだが、ゆっくり歩いても息が切れ、何度も立ち止まって呼吸を整える。避難小屋が見えるあたりからトレイルはなくなり、大きな石の上を歩いて山頂を目指す。

午前8時半。山頂付近の避難小屋に到着。小屋の前にあるノートに記帳する。

避難小屋の脇には、周りを石で囲んだテントサイトがある。頂上は、避難小屋の向こうにある三角形の大きな石の上。その上に登り、近くにいたハイカーに頼んで二人の写真を撮ってもらった。

ホイットニーの山頂は、JMTの終着点である。ここには、10数名のハイカーがいて、350kmのロング・トレイルの踏破を喜び、笑顔で記念撮影をしたり、あたりを眺めたりしている。私達も2度目の全行程踏破に大満足で、しばらく山頂で喜びに浸った。

長い下山路に備え、一時間ほどで山頂を後にする。

下り始めると、デイバックにパーミット（登

山許可証）をたなびかせたハイカーが、次々に登って来る。ホイットニー・ポータル（トレイルヘッド）からの日帰りハイカーだ。

「何時に出た。」と、聞くと、

「午前2時。」と、答える。ポータルから9マイルを8時間かけて登ってきたのだ。

ホイットニーへの登山は、日帰りでもパーミットが必要で、入山枠も一日100人とされている。日帰りのホイットニー登頂は厳しい。午前2時に出発したとして、山頂に着くのは10時過ぎ。お昼前に下山を始めても、帰るのは6時頃だ。速い人は16時間で往復するというが、22時間かかったという人にも会った。

それに、ポータルからの標高差は2000m。一気に高い所に登ると高山病になる恐れがある。私たちは、今までに二度ポータル側に下山したが、お昼前になっても山頂に着けそうになり、パーティもいたし、登頂をあきらめて下山する人にもたくさんいた。中には、気分が悪くなったのか、途中で横になっている人もいた。

しかし、ホイットニー登山はなかなかの人氣で、山頂からポータルまで、たくさんハイカーとすれ違う。JMTで、最も多くの人が行き交うセクションである。



山頂からローン・パイン方向を見る

トレイルジャンクションにもどって、リックを背負い、体が再び重くなる。それにわずか数

100 mであるが、トレイル・クレストまで登りだ。そのトレイル・クレストからホイットニーを振り返る。西側からの眺めと違う、切り立った垂直のがけをもつ勇壮なホイットニーだった。



東側から見たホイットニー（中央）

トレイル・クレストからは下りの連続。岩場のスイッチバックを降りると、トレイル・キャンプ。ホイットニー・ポータルからの最終キャンプだ。風が強いため、どのテントサイトも風よけの石囲みがしてある。ルールでは、キャンプサイトに溝などをほってはいけないが、風よけの石囲みは許可されるようだ。

ここには、ソーラー・コンポジットのトイレがある。太陽光でモーターを回し、排せつ物を分解する仕組みだ。

さらに降りるとミラー・レイク。二つ目のソーラー・コンポジット・トイレを過ぎると。ポータルからの最初のキャンプ地、アウトポスト・キャンプに出る。

さらに下るとローンパイン・レイク。ここは森の中のスイッチバック。乾いた土のトレイルは悪くはないが、連続した下りで脚の疲れは、ピークに達する。それでも歩く。下りに弱い妻は、膝にサポーターを付ける。妻は遅れがちで、私は何度も立ち止まって待った。

そのうちに車のエンジンの音が聞こえる。こ

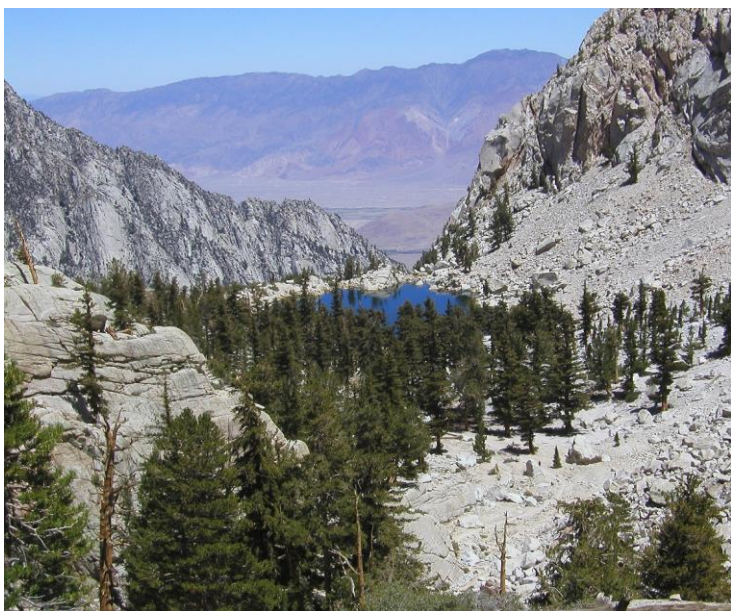
の10日間聞かなかった車の音だ。車道や車、キャンプグラウンドも見えてきた。

午後2時。ホイットニー・ポータルのトレイルヘッドに到着する。ヨセミテを出て16日目。二度目の全行程踏破は無事終了した。

グリル兼土産物店の公衆電話からビショップに住む友人に電話をかけ、到着を知らせる。今回も雨は一滴も降らず、落雷や山火事の心配もなかった。強風や行動を遅らせるような積雪もなく、蚊もいなくて快適だった。

私たちは、無事踏破できたことを祝して、ビールやコーラで乾杯した。

一時間後に来てくれたのは、毎年お世話になるフェンドン夫妻。ここに迎えに来てもらったのは3度目である。フェンドン夫人は、私たちが遠くから出発し、何日もたつてからスケジュール通りにもどってくるのが不思議だという。ジョン・ミューア・トレイルを歩いた16日。私たちにとつて、ほんとうに充実した、すばらしい16日間であった。



ローンパイン・レイク

Day 16,
Whitney Portal,
Elevation 2,548 m
13 miles (20.8 km)
from Guitar Lake